

十月興行座
文樂



淨瑠璃形人

一部 金十五錢

しむつ四
座樂文

本年最後の總出演

十一月興行

代表的十八番揃ひ

黄菊の薫り白菊の美ともに競ふてよろしき候ます。御健勝の御晴やかさを謹んで祝福申し上げます。偕て、御愛好切なる文樂座人形淨瑠璃の十一月は本年最後の總出演興行と仕り語り、物も津太夫の寺子屋、土佐太夫の紙治内古靱太夫の尼ヶ崎と極め付十八番を揃へ若手連また「千本櫻道行」に元氣一杯の熱演を見せ人形の双璧榮三文五郎共に大序より大切まで大活躍の豪華でこれこそ今秋唯一の收穫でございます。御厚情切なるみなさまの御聲援によつて空前の盛況を贏ち得ますやうお早々とおはこび下さいまし。

昭和七年十一月

文樂座

昭和七年十一月一日初日

初日午後二時開幕
二日目より午後三時開幕

御觀覽料

- 一等椅子席 御一名 金三圓
- 二等 席 御一名 金一圓五十錢
- 三等 席 御一名 金八十錢
- 一等お座席 御一名 金三圓五十錢

一等お座席は五日前より一等椅子席

前賣切符發賣致居候

前賣切符 南四七一一番
 專用電話 七四〇八番
 電話南 三七八八番

お草履の準備は御座ぬます。靴草履はそのまゝ御入場出來ますからなるべく靴、草履でお越しを願ひます。

本誌へツカト廣告御掲載希望の向は文樂座編輯部へ希す

あゆる印刷

永井日英堂印刷所

大阪市西區土佐堀通丁目
 長三四四番
 九九四番
 〇四四番
 三〇一番

(44) 土佐堀



大天自天...

大天自天...

二系 山西...

妙心香...

中...

...

...

...

...

...

...

...

三味線

Grid of small text characters, likely a list or index.

Grid of small text characters, likely a list or index.

大天自天...

大天自天...

文樂座人形淨瑠璃
本年最後の總出演

晩秋を飾る

十一月興行

二日目の豫定時間表

前繪本太切記

二條城の段より
尼ヶ崎の段まで

二條城中の段 (三時より三時三十五分まで)
妙心寺の段 (三時四十分より四時三十分まで)

幕間 十分間

尼ヶ崎の段 (四時四十分より六時廿分まで)

幕間 二十分間

中菅原傳授手習鑑 寺子屋の段

寺子屋の段 (六時四十分より八時十分まで)

幕間 十分間

次小春 心中天網島 紙屋内の段

紙治内の段 (八時二十分より九時五十分まで)

幕間 十分間

切義經千本櫻 道行初音の旅路

道行 (十時より十時三十五分まで)



人形芝居について

- ◆ 人形芝居發達の事
- ◆ 文樂座なり立の事
- ◆ 人形頭説明の事

今から見ては簡單なものに相違なかつたけれど、後世人形と呼ぶ種類の物は、日本でも遠い昔からあつたのであります。其れは傀儡子に

始まつたもので、傀儡子の名は已に十餘年前に『和名抄』や『新猿樂記』『靈州往來』に見えて居り、傀儡子の輪廓は、王朝末期の文章博士大江匡房の『傀儡子記』に傳はつて居つて、傀儡子は遊牧の民で、男は狩を表業に、木偶や土偶を舞はせたと御座います。其當時に、四三と云ふのが傀儡を舞はせた事が『散木奇歌集』に見えて居ります。手遣ひの幼稚な物には相違なかつたので、多少の糸が附いて居たかも知れない、と云ふ想像は出来ない事もありません。其後傀儡子は、門附か辻立で命脈を維いで居たりしう御座います。浄土宗の起るに至つ

て、傀儡子の大方は浄土宗の行者になり、特技の人形を舞はして勸化の効を顯はしたものとらしく、所謂首掛け芝居の形式ではあつたが、菩薩の本縁や、神社の縁起、即ち謂ふ所の本地物を語る説經と結んで、人形舞はしは自然と諸國に擴がる様になりました。之れが人形舞はしの擡頭する遠因だつたと思はれます。而して、其内には例の三味線が渡來して來るし又お粗末ながら淨瑠璃といふものも出來た、即ち京都の目貫屋と云へるが西の宮から人形舞しを誘ひ出して、茲に始めて三味線に上した淨瑠璃、又それに合せて舞す人形と此三者が綜合される事に成りました。

たのが、慶長年中、即ち徳川の始
頃ですが、忽ちにして京では四條五
條の如き或は江戸の堺町さか葺屋
町さか、櫓が立つて此人形芝居も繁
昌したのであります。順序として當
然此頃には最う人形の類も増しては
ゐたのです。然し舞臺などは固よ
り無く其人形とて首があるばかり、
遣ひ手の手が人形の着物の裾から袖
口へ出されて舞されたもので、大阪
の石井飛彈掾が始て其手足の工夫も
したものですさか、由來此掾號なる
ものは人形師の所有なりしを後に淨
瑠璃太夫の勢強くこれを専らにす
るに至つたこの事。さて竹田のから、
くり人形が出来たり、野呂松のの

る、人形が出来たり、次郎三郎が
おやま、人形を使つたり、殊には彼
の元祿時代になるまで大阪へ義太夫が
現はれて竹本座をはじめ、又近松翁
が現はれて此義太夫節のために人形
芝居に最も適切な名淨瑠璃を澤山書
き卸しし、かも其人形遣ひとして
辰松八郎兵衛と云ふ名人も出て、
今の出遣ひの如きも此人によつて始
まつたと云ふのが、始めは此人形を
下の幕さ上の顔隠し幕の間から出し
て遣つてゐたので、畢竟人形の動
くに随つて自然遣ひ手の身体も動く
これが見好くないから黒幕の蔭に黒頭
巾して遣つてゐたものを、愈々今度
八郎兵衛が袴を着つて手摺を離れ無

し、事がないといふ評判を取つたので
あり、加之他方また豊竹座の出
來るあり、即ち西と東と同じ大阪の
地に於て太夫三味線、作者から人形
遣ひと全く競争的に繁昌を來した
のですから、従つて其進歩發達は眼
覺しいものがあり、道具建から人形
衣裳總ては美々しく立派やかを盡
し、舞臺大幕の上に小幕を引くやら
山簾を本山の張ぬきにするやら、
太夫も出語りをするやら、例へば人
形にしてから先づ眼が動き、指先
が動き、享保の末には竹本座『大内
鑑』の與勘平彌勘平が腹をふくらま
し、元文になるまで豊竹座『武烈天皇

儀」の佐手彦の眉を動かしてはじめる
 など、非常に發達を遂たのでありま
 す。即ち言を換れば當時名人の遣ひ
 手が輩出した次第で、中にも吉田文
 三郎の如きは享保始め竹本座の「國
 性爺後日合戦」に初出勤、錦舎の出遣
 ひに片手の暗業を示して以來、さいふ
 ものは實に此人形については工夫を
 凝らしたもので、其一例を擧ぐれば
 ある『夏祭』の人形に始て帷子衣裳
 を着せるさか、或は其遣つた一寸女
 房おたつに桔梗の帷子、黒襦子の前
 帶淺黄の綿帽子を着けさせた如き、
 今なほ歌舞伎で真似てる所事實此時
 代さいふものは操盛んを極めて歌
 舞伎ばあれど無いも同然、幟は林立

して其最負は凄まじい有様であつた
 と云ひます、江戸にて矢張りと同じ
 く、慶長の昔薩摩淨雲が淡路の人形
 舞し、此人形芝居を始めて以來、各
 派の淨瑠璃芝居が誠に繁昌してゐた
 のですが、享保に一端大阪の義大夫
 芝居が入つて來てからと云ふものは
 又漸次に其勢力範圍を成つてしまひ
 御案内の同様に歌舞伎狂言などは全
 く此人形の眞似のみ演てゐたもので
 あります。前云ふ辰松も三郎兵衛も
 共に江戸へ來て其妙技を揮つた事が
 あるのです。兎も角も此人形芝居の
 全盛は凡そ百年間、寶曆から明和以
 後になるに漸次本場大阪でも亦江戸
 の方でも其勢力は歌舞伎に奪はれ、

結局あの大坂の新興北堀江座すらも
 大した事には成らなかつたと見るべ
 きであります。然し此間に在つても
 人形は其一個に所謂黒坊四五人も掛
 かり、或は出遣ひたり二人も掛かる事、
 其他大夫の引拔早替などのクレン早
 業は愈々進歩を見せたので、而も操
 芝居としては前述の如く、其後は盛
 んならぬ各座の起伏消長が今日に
 至れりと云ふ次第で、それも今や獨
 り當大阪の文樂座が現存するのみで
 他には語るべきが無いのでありま
 す。さて當文樂座は百餘年の昔淡路
 の人榎村文樂軒が大坂高津區に櫓を
 起したのに始まり、一時中絶しまし
 たのを十七年終に東區淡路町五丁目

御靈神社境内へ移つたのであります。以來發展を來たしてゐましたが大正十五年晩秋不慮の災禍に喪失しました。機を得て昨昭和五年一月四少橋に新築開場した次第であります。而も日本にこれ一座ぎり云ふのは心細い次第で、彼の能樂と同様日本の古典的舞臺藝術として、之を永遠に保存すべき、怖らくは國民的義務があらうか。考へます。次第で御座ゐます。序でながら此人形は大體、首胴、手及び足の四部に分ける事が出來、而も其首あるひは頭につきましては勿論大まかではあるが大體の役々が定まつて居ります。例へばげんびし(檢非違使)と云ふのは、竹本座

の「用明天皇職人鑑」の時檢非違使の役に使つたから此名が出たので其後は廣く世話時代共に用ひられて、例へば「寺子屋」の源藏、「妻八」の八郎兵衛、或は「千本櫻」の銀平、「陣屋」の盛綱のとき、なほ之の眠り目なるはあの盲兵助などに使ひます。今では實盛なども之ですが然し南水漫遊などを見るに別になつて居るやうであります。それから矢張南水漫遊には素盞鳴とありますのが今の所謂孔明と呼ぶ頭で由良之助などにも便ふ事があること云ひます。兎もあれ昔相函や「薄雪」の兵衛、あるひは「紙治」の孫右衛門などを勤める首で矢張竹本座へ近松が書いた「日本振

袖始」から出た人形だと申します。それから若男といふのは源太とも呼んでゐるが聞きませんが持役として「朝顔日記」の駒澤に「太十」の重次郎、その眼隅へ張を入れ其肩を引きつめるが「阿古屋」の重忠に成つたりし他種類の若男は致盛の役なごをするご云ひます。又所謂おやまの中にはおむすご云つて之は勿論娘の事で「野崎」のお染「壺坂」のお里「妹背山」のお三輪などを勤めるのがあります。南水漫遊に傾城とあるのも多分のご同じものかと考へます。斯んな具合で今云ふ南水漫遊には凡そ廿六種の人形品目が擧げられて居るのであります。



前繪 本太功記

二條城中配膳の段

二條城の段
妙心寺の段
尼ヶ崎の段

武智光秀 竹本文字大夫
浪花中納言 豊竹和泉大夫
小田春永 竹本鏡太夫
森蘭丸 豊竹呂太夫
武智重次郎 竹本陸路太夫
野澤勝平助

人形

小田春永 吉田玉之助
森蘭丸 吉田光七
浪花中納言 吉田玉七
武智重次郎 吉田玉三
武智光秀 吉田榮三

この床本は近松柳、近松湖水軒、近松千葉軒の合作で寛政十一年七月十二日初日の豊竹座で上演されたのが初演、初演の折は發端より十三冊目まで上演されたのが後世何冊目と引抜いて上演されるに到りました。書卸し當時紋下の麓太夫が十冊目尼ヶ崎を語つてゐます。本能寺の段は第二冊目で『眞書太閤記』を原に脚色したものです。筋は天正十年夏、京本能寺の旅舎で小田春永が三法師丸を襲應を催した夜、宿怨の武智光秀

が反逆して夜討を仕掛たので蘭丸が力戦するこいふ、有名な本能寺の夜討を仕組だもので、これに蘭丸と侍女しのぶの戀を絡ませて色取とした段であります。尼ヶ崎の段は十冊目俗に『太十』といはれてゐます。光秀は小田春永から勘氣をうけ領地を召上げられたので反逆心を起し春永を本能寺に夜襲して殺したので久吉は高松城を水攻めの最中であつたが主君の死を聞き和議を整えて光秀征伐に歸つて來た、光秀の母皐月は光秀の反逆を悲しみ廻國修業に出た光秀も悔いたが四方田に勧められ、伴十次郎と共に久吉と戦ふことになつた。この尼ヶ崎の段は廻國に出たさつきの閑居であります。旅僧に身を篋して一夜の宿を態さ乞ひ家の様

子を探りに来た木下藤吉を光秀は刺すつもりで母臯月を刺殺してしまふといふのがこの段の内容であります

(床本) 二條城配膳の段

扱も其後天正十年六月上旬の事かよ、内大臣平の春永東北に猛威をふるひ、押して都に上洛あり、御嫡男城之助春忠二條の御所に居を占めたまひ天葵御香を入れ賜へば饗應の役人は武智日向守光秀森の蘭丸初めとし、譜代の良臣古老の諸士列を正し、相詰る院の御所の内勅浪花中納言兼冬仰せ出さるゝは往昔應仁の亂れより諸國の逆賊王威を輕んじ都の内へ軍馬を引入れ玉座近く馬蹄に穢し敷慮穢ならずりに、幸ひ春永大志を抱き帝都を無事に治むる條、主

上御感淺からず其功を賞じ賜ひ嫡子城之助春忠を從三位に叙し左中將に任ぜらる院の内勅斯の通り有ければ春永はつこ平伏ありコハ有難き勅命不肖の某、何ぞ一臂の力に及ばん三好を初め逆徒原四方に退散致せしも君の聖德數ならぬ悴春永身に餘つたる官位昇進天恩謝するに詞なしと勅答あれば兼冬卿、中々満足の御氣しき春永重ねて軍勢に暇なき某、心斗りの御饗應鄙びたる觀世能御上覽も時の興、イザ奥殿へさ有ければ袖かき合せ兼冬卿武智が案内にしづくさ奥の間さして入賜ふ春永後を見送つて蘭丸これへさ近く召され、汝も兼て知る通り無二の忠士と思ひの外、心得がたき光秀が心中彼が心を探らん爲いつぞや安土において諸

侯の身の前、恥辱を興へ恥しむなれご面に怒りを現はさす無念を忍ぶ彼が胸中猶以て不審の一つ其儘にさし置なば虎の子を飼ふに同じ、逆心の企あるや虚實を探りためし見よさ仰に蘭丸さん候、武智が行動聊か不審に在る折から御符を合す君の御心思ひ合する彼が俗性、頭上に喜怒哀骨ある者は主人にたたるさ異人の禁めもし逆心に極まらば討て捨んに手間隙入らず、奥へ踏込引捕へヤレ魔忽なり、蘭丸、實否も糾さず、あら立なば返つてひが事出来せん、事によそへてナ、合點か、ハ、畏り奉る、必ず油斷いたすなご、しめし合して春永公帳臺深く入賜ふ、蘭丸は只一人兩手を組で思案顔、時刻も移る巳の上刻武智が一子重次郎古實を

守る饗應司、配膳のかけばん、山海の珍味美をつくし、目八分に捧げ来る、蘭丸見るよりコレサ重次郎まづ待れよ、饗應の役目はお手前の親父光秀殿、此蘭丸兩人立合申合せもあるべきを自分一人の取斗らひ此蘭丸は呑込めぬ、膳部の次第はいかゞでござる、ハア、御料理は板元奉行中井半左衛門、七五三の獻立、ナニ七五三、ハテナア、何にもせよ、相役の某に一應のこたへもなく氣儘なるいたし方、近頃以て不埒千萬、此分では差置れず光秀殿へ直應對、イテ役所へさかけ行向ふ襖ぐはらりさ出来る武智、蘭丸傍へ詰寄様子残らず聞かれしな武士は禮儀を表さするに、此蘭丸を踏付け仕方いかなる趣意かいへ聞かんサアくくく返

答次第手は見せぬさきつば廻せばハ、コハ仰々しや蘭丸這若氣の一徹何故貴殿を侮申さん最早御膳の時刻故役目大事と勤る光秀だまり召れ饗應の役貴殿拙者に相勤よさは主人の言付け主命をもごき自分の氣儘にせらるゝはエ、聞こへたこりや何か拙者を役に立すと思召しか、但しまた智惠者と呼ばれた武智殿人を見下す高慢か、イヤハヤ人も知たる其元の素性何の浪人のよるべなく所々方々をうるたへ廻り北國において詮方なく權に盡たる身のせつなき、士民共の小悴をあつめ手道指南の禮物で命をつなぐ寺子屋のお師匠様、まああるくいつぞや江州佐々木征伐の折から此下で先手を争ひ箕作和田山時浪の合戦、久吉に仕負ても恥を

恥さと思はぬ其元何ぞそふではござらぬか、ま心に思はぬ傍若無人、肘張かけて言放す、さしもの光秀くはつさせきあげヤア物に狂ふか蘭丸大切の場所と事を慎み言せて置けば法外千萬、今一言いつて見よ、舌の根の切下んチ、ならば手柄に切て見よチ、切て見せふサアくく、兩方が互ひ詰寄せ詰寄り、既に斯よと見へたる所襖あらはに春永公、飛か、つて光秀が袴髪擱んでごぶご捨付やをれ光秀凡そ武家の格式は古實を以て式法を用る、過たるは猶及ばざるにしかじさは古人の金言、院の内仗も重けれど皆それくの例法あり、中納言殿饗應の膳部、金銀の瓶器を用ひ、七寶を芥の如くちりばめ法外奔走、此後主上仙洞の行幸には何を

妙心寺の段

口
竹本源路太夫
鶴澤友右衛門若
鶴澤綱右衛門夫
野澤寛太夫
奥
竹本綴太夫
豊澤新左衛門

人形

母さつき 吉田小兵吉
妻操 吉田文五郎
四方天但馬守 吉田玉幸
嫁初菊 吉田扇太郎
武智重次郎 吉田玉松
武智光秀 吉田榮三
軍兵大ぜい

以てか饗應に叶はんや、其上蘭丸が申すは我詞も同然なるに異變いたすはコナ慮外者、煩ぶて蘭丸ハア、早くぶてハア、ハア、蘭丸が腰の鐵扇ふり上て御上意、く眉間眞向つゞけ打ちくい入る要に血に瀧津瀨是はさ立寄る重次郎膝にかためて引敷光秀流るゝ血涙諸共に眼血走る無念の顔色、春永つくゝ打守りいかに光秀今蘭丸が手を以て春永が折檻、口惜ふは思はぬかこ、底意を探る大將の詞に光秀居直りてハア、コハ仰共覺へず數なられ共武智光秀君に捧げし我命、骨はひしがれ身はすたゝになることも大恩ある御主人をお恨み申さん様はなし、左はさりながら世の人口、春永こそ鬼の再來情を知らぬ大將と譏りを殘し賜はん

事、未代までお家の瑕瑾齷齪を憎む御性質諸士の恨みは小車のついに御身に報ふこい御心の付ざるは、チエ、淺間しや悲しやなア御心をひるがへされ連れ仁義の大將と呼ばれ賜はれ、我君と或は怒り或は歎き五臟をじぼる血の涙、金言耳に逆立大將猶も怒りの聲あら、かヤアいはれぬ諫言推參至極目通り叶はぬ立てうせふソレ蘭丸武智光秀親子の者門外の引出せサ早く、こはげしき下知はつと領掌、蘭丸が猶豫はいかにこきめ付られ無念重なる光秀が我子を引立て出て行く、底意は誰かしら涙の萬里に羽打大鵬や面目涙重次郎身はしよけ鳥の片羽かひ、父の心はしらにぎて、神も佛もなき世かこ身をかこちたる忍び音の胸はくらやみ五月やみ

詮方涙諸共に御門の外へ。

(床本) 妙心寺の段 (口)

扱も逆賊武智光秀多年の恨み一戦に
春永父子を討奉り妙心寺に誓を構
へ勝ほこつたる諸軍の勢ひ俱に威風
を現はして備へ殿しく守り居る、中
央には光秀の母さつき齋の上に座を
しめて、イヤのふ四方天何事も見ざ
る聞かざるいばざるに、咄しがあら
ば嫁女庚申待に緩り聞かふ、ドリ
ヤ奥へゐて夢でも見ましょ立を引
留め但馬守、後室様の御立腹其理な
きにはあられどもそれは一途の思し
召、暮下となつて春永へ身を寄せ賜
ひし御大將、時を得て、其機に臨む
は天の時を知るさいふ何卒御機嫌直
されて、光秀公に御對顔、偏に頼み

奉るご願へば俱に嫁操只幾重にも
ご手を突て願ふ心の夫思ひ、道理に
も又殊勝なり、さつきは少し面を和
らげ、それ程にまで皆の衆が頼みを
聞かぬも年寄の片意地、そんなら息
子殿の歸り次第奥へしらしやコリヤ
女共ば来て腰を打、ヤアエイと老の
立居もおもく嫁が介抱四方天引
添てこそ入にける、斯たる世にも花
ひらく色香もしるき初菊が奥の透間
を立出てほんにまあ此重治郎様はし
んきなお方ではあるはいなア、こち
の思ふやふにもない、間がな透かな
軍學さやら、色の道には疎いので一
倍心いためるご女心のものおもひ
うしろに立聞く重次郎初菊殿是にか
さいふ聲聞てヤア重次郎様がエー聞
へぬはいなさ、ばかりにて、後は得

言はぬおぼこさは赤らむ顔に現はせ
り、これはまた嗜みやいのふ又して
もく顔さへ見れば恨のたらく親
々のゆるしを請けて未來永々かはら
ぬ女夫少しも隔はないはいのアイ
エくつんさもふあたしんきな、永
々ごやら未來ごやら其さきの世は知
られども縁を結ぶの神さまが御苦勞
なされうない、子のふり分け髪の其
中からあれこそはこの結び今親の赦し
もあるものをついに一度の逢瀬さへ
ないは餘り胸怒な、お情けないご娘
氣の胸のありたけかきくごき恨みか
こつぞ道理なり、思ひは同じ重次郎
今もふ、今迄は不調法以後は屹度嗜
む程にコレ赦してたもくそんなら
願ひをハテ誰憚からぬ言號、世間廣
ふ遠慮はいらぬエー、忝や婿しやご

ひつたり抱きつき妹と脊にわりなく見へしゑにしなり、折から轟く響の音光秀公のお歸りぞ知らせに悔り飛退く二人所体繕ふこなたより、妻の操も出向ひ待間……。

(床本) 妙心寺の段 (奥)

程なく立歸る武智十兵衛光秀武威轟かす強將の常にかはりし屈托顔、席を改め詞を正しホ、三人共出向ひ太儀シテ母人には御機嫌能くお渡りなさるゝかサイナア先程も但馬守と自かわつつくごいづごふやら斯やらお口が和らぎ母公様とも睦じうム、ホそれは重疊、出かいたく左あらば直ぐさま御對面、イヤそれには及ばぬ母が直々参らん、そこへ襦を引かへて、木綿布子に風呂敷包せな

にちよつこり賤の女の姿見るより鶴く人々操はそばに摺密て系圖正しき武智の御家殊更四海の武將共仰がれたまふ夫光秀天下の御母公様とも言はるゝ御身が淺ましきお姿はもしやお心違ひしかご尋ねに、につこご打笑ひ、ホ、忝くも清和源氏の嫡流たる武智の系圖、もごより武勇の家柄なればたれに恥べき謂れなし、老は寄れども心は鐵石、濁しても盗泉の水を吞ずとはお身達もよふ知て居やる筈、心穢れた我子の傍、片時も座を同じうせんは我日本の神明へ恐れあり、伯夷叔齊を習ひ只雲水に従ふて出母、是が此世の別れぞご我強き母も恩愛の涙まぎらす有様はいさゝ哀れぞ増りける、光秀は黙然と差うつむいて、居たりしむ操の方

は涙ながらコレ申我夫母様の只お一人何國をあてご長の旅、なぜお留なされませぬぞホ、不忠不孝この御さげし今更申す詫もなく、せめては母のお心にさからはねが寸志の孝、四海の内は此光秀が掌にある。お留申な其儘々々チ、遠は悪人程有て根強い魂、チエ、いはんかたなき人外めさ、にらむ目元にはらゝゝ涙隠して、立出る、心のはり弓強弓の引ぞ煩ふ嫁孫の中に悲しき初菊が是のふ申祖母様と控へる、手元振拂ひ見返りもせず出て行く、わつと泣き出す人々を制しごめてヤア、者共母人の御行衛何國までも見届けよ、御手道具の用意々々光秀が鶴の一撃あなた軍卒箠長持挾箱其外雜具銀乗り物、御母公様のお姿を

見失ふなと足早に後をしたふて急ぎ行、影見送りて光秀は何角心に打うなづき奥操せむれ重次郎、嫁初菊諸共次へ立ちやれ用事あらば手を鳴すま心有げな詞のはし、アイこはいへど立兼る、ヤアぐすく何を猶豫早々立よさきめ付られ心は後に残り共親子三人打連れて是非なく次へ入相の鐘が無常を告げ渡る、げに物凄き庭の面、忍び出たる四方天、君の様子はいかゞぞ身をひそめてぞ窺ひ居る、それさばしらぬ光秀む有合現引き寄せて筆くひしめし唐紙の表に何やらさらさらスを見るより重次郎瞬もせず物陰に守り居る共白書院、只一心に書認筆投捨てむんす座し諸肌くつろげ指添を抜や玉ちる氷の及や、打眺め、兩眼には

ら涙くひしびり既に斯よこ見へければ主従小影を走り出ヤレ早まりたまふな父上と取付く重次郎四方天鏡の如き兩眼をくわつこ見開き聲ふるはし、コレ我君、コレヤこなた狂氣召されたの、今朝より始終の様子心得がたく思ふ故萬事心をつける某物陰より窺へば出かし顔に辭世の一句順逆二門なし、大道心深に徹す、五十五年の夢覺め來て一元に歸すまは何のたは言、君臣を見る事塵芥の如くせば臣君を見る事怨敵の如しと春永猛威に増長して神社佛閣を焼失し萬民の苦しむる暴悪神明これを誅するに光秀の御手を以て討し賜ふ、天の興ふるを取されば災其身に歸す左程の事を申さず共よく御合點のこなた様切腹さば馬鹿々々しい人は

しらす此四方天但馬守殺す事罷りならぬさ居尺高、チイそふじやく父の命は我々始め萬率に至るまで御一身に及ぶ御命臣義を守る共君是を補助せざるは夫將こは申されず、只生害は止りたまひ、下萬民の苦しみを赦ひたまへさ右左涙と俱に諫めの詞光秀はたこ横手を打ハア誤たりく一天の君の御爲には惜からざりし此命暫しはながらへ事を計ん先は繪旨を乞請て猶も背ん者共をここく誅戮せん、急ぎ是より我は參内汝等二人は久吉む都へ登るを半途に待受け一戦にばつ返せよ、イテ裝束をさ立上れば近習小姓が心得て運ぶ大紋烏帽子立派に着なす骨柄は邊輝く其粧ひ早引出す栗毛の駒光秀ゆらりさ打乗てヤア十次郎但馬守

夕顔棚の段

竹本大隅太夫
鶴澤道八

尼ヶ崎の段

切豊竹古剱太夫
鶴澤清六

人形

軍	武	和	武	眞	嫁	妻	母
	智	藤	智	柴			
	光	正	重	久	初		
兵	秀	清	次	吉	菊	操	さつき
	吉	吉	吉	桐	吉	吉	吉
大	田	田	田	竹	田	田	田
ぜ	榮	文	玉	政	扇	文	小
	三	作	松	太	太	五	兵
い				郎	郎	郎	吉

諸共に西國へ馳向ひ必ず共に油断なく軍功を現はせよと詞にはつと四方天ハ、君御出陣には及ばず共某彼地向ひなば狼冠者めが素頭を討ち取は手裏にあり、アイヤ彼もしれ者定て遠き計略あらんコハ親人の詞共覺へず父にかはつて某が軍配取て一戦に敵の首を實檢に備へんコレ氣づかひあるなと勇み進し我子の骨柄、ホ、天晴々々潔し我も後より出陣と手綱かいくりしこく乗出す、駿足馬上の達者響の音は秋の野の虫にはあらでりんく綸旨をやがて頭に戴き及向ふ奴原打立追立切散し追付四海に羽をのさんいそふれやつさいつさんに大内山へこ。

(床本) 夕顔棚の段

南無妙法蓮華經くくく御法の聲も媚し尼ヶ崎の片邊り誰住む家と夕顔もおの儘なる軒のつまあたり近所の百姓共茶碗片手に高咄しなふ婆様もな様も見た所が上方で歴々のお衆そふな何の爲に面白ふもなこの在所へはござつたぞいのアコレく甚作そりやいやんな、京の町は武智さいふ悪人が春永様を殺して大騒動、大かた又下へ下つて居やしやる久吉殿が戻つて来て、武智と是非に一合戦なけりや濟ぬばいのふそんなら年寄はうかく京の町には居られぬ、さかくあぶなげのない様に、こんな在所へ来て、居るが大できく、時に近付がてら妙見講を勤

るさばよい手廻し大きな馳走に逢ました是から随分心安いたしませうサア／＼のふさ口々に言たいことをたくしかけ、しやべり廻つて、歸りける、老母はつゞ／＼門送り庭の千草に打つ水も、たもつ葉毎に、風かほる軒を目當にくる人は武智が聞に咲く花の操の前は家來を遠ざけ、嫁の初菊伴ふて窺ふ切戸の庭先に花に心を養ふ老母、それを見るより手をつかへ後室様の見舞として只今參上致せし懇懃に相述る詞に老母は打笑み、チ、珍らしい嫁女孫嫁はるん、の道よふこそ／＼さりながらせむれ光秀當月二日本能寺にて主君を寄せし無法者、同じ館に膝ならぶに先祖の恥辱身の汚れを捨て此在所へ身退きし此姿を見舞さむむこ

がましい善にもせよ悪にもせよ夫に付む女の道操の前は武智十兵衛光秀が妻、そなたは又孫の十次郎光慶が嫁でないか生死別らぬ戰場へ趣く夫を打捨て浮世を捨てた姑に孝行盡すは道が違ふ妻城にさまつて留守を守るが肝要ぞや、モウやもめぐらしの樂しみにば夕顏棚の下涼み捨つべきものは可矢ぞ言放したる老女の一徹、後は詞もなかりけり、常の氣質さからばず、いかさま後室様のおつしやる通り此様に只お一人ござつたら何もかも氣さんじでマア第一はお身の養生今から私も初菊も後室のお傍に居て飯も焚たり茶も沸しお宮づかへをせふぞいのさ、ありあふ前垂襦の上に引しめ茶釜の傍、端香のこもる姑のしぶ／＼機嫌を取り

かれる娘心に初菊もマゴふ濟事か濁り井の深き奇縁の釣瓶繩水汲み上げんご立寄れば、コレ／＼嫁達シテ孫十次郎は城に殘て居めさるか、さればでござります、十次郎が願ひにはごふぞけふの軍に高名手柄むあらはしたいさ父上までは願ひしかご、婆様のお赦しなきに出陣するも本意でなし、母に取次してくれさ、くれん／＼の願ひ故餘り健氣さ祖母様に御機嫌の程いかゞぞ窺ひに参りましたと語る内老母は涙をばら／＼と流し、チ、うるさの嫁がもの語り、主を討たる逆賊の邪非道の軍の評定聞くかいやさのこの住居も又孫をほめるではなけれ共非道な伴光秀が子に十次郎さいふ武士が生れてくれるさば是も因縁、悔んで、返らず、戦

塲ばの事こと聞ききたふないア、いや／＼情なさけなの浮う世よやま、無む量りやうの思おもひ百ひゃく八はちの數かず珠たまつまぐつて居いたりける、折おふし表おもてへ草くさ鞋せがけ風ふう呂りよ敷しき脊せにいつきせき蛙か飛と込こ道みち野の邊への清しみず水みづむすばん夏なつの旅たび西方せいほうもどきの僧そう一人ひとり、門かど口ぐちに立た休やすらひ諸しよ國こく修しゆ行ぎやうの一人ひとり旅たび、近ちか頃ころ申まをし兼かたれど御ご宿しゆくの報ほう謝しゃに預あづかりたし押お付つけながらと言い入いる聲こゑを老らう母ぼが聞き取とりて、見み苦くしうござりますれどお心こゝろおきなふ御ご一いつ宿しゆく、それば千萬せんばん忝かたじけない左ひだり様さまならば御ご遠とん慮りよなしに御ご免めん／＼こ上かみり口ぐち、腰こし打うかくれば二人ふたりの女おんな、草くさ鞋せの紐ひもを解とか／＼ればア、勿な体たいない／＼構かまふて下くださりますな、旅たび仕しつけた坊ぼ主しゆの氣きさ
んじ、木き納な家やの隅すみでもついでころり蚊か帳やも蒲ふ團たんも入いませぬ、お心こゝろつかひ御ご無む用ようと、詞ことば半なへ表あ口ぐち、人ひと目めを忍しのび

只ただ一いつ騎き窺かがひ立た立たり武ぶ智ち光くわう秀しゆ心こゝろ得えた
き旅たび僧そうこ、生い垣かき押お分わかけさし覗のぞき思おもは
す見み合あす母ははの顔かほ老らう母ぼは何なにか心こゝろにうな
づきチ、わしとした事ことが心こゝろの付つぬコ
レ御ご出で家や様さま此こ板いた園えんひが則すなは風ふう呂りよ塲ば、
水みづは幸さいひくんであり、ついばや／＼
こもやして、あついで時じ分ぶんじや行い水すいし
て休やすんで下くださりませ、婆おばも後あとで相あ件けん
しませふ、マ、イヤそれには及およびま
せれど相あ件けんさあれば沸わかしませう、そ
んなら御ご免めんなされませふこ包つみ引ひき
げ氣きさんじに、湯ゆ殿とのをさして入いにけ
る、味あじ方かたの軍ぐん卒そつ兩りやう手てをつき、御ご息そ
十じゆ次じ郎らう光くわう慶けい後ご室しつ様さまに御ご願ねがひの筋すぢあ
りさ今いま是こゝへ御ご越こさいふ間ま程ほどなくし
づ／＼と家け來きに持もせし籠かごかき入いれ
させて打う通とりコレヤ／＼者もの共どもそち達たち
に用もち事じはない、陣ぢん所じよへ早はやくさおつ立た

やり、威い儀ぎを正ただして兩りやう手てをつき母はは様さま
をもつて御ご願ねがひ申まをせし出で陣ぢん、御ご聞き
届とどけ下くだされなば、武ぶ士しの本ほん意い十じゆ次じ
郎らう思おもひ込こんで願ねがひける、老らう母ぼは見みる
より、機は嫌けん顔がほチ、めづらしい十じゆ次じ郎らう
出で陣ぢんの願ねがひさな、悴せがれを見み限かぎり此こゝ所ところへ
身み退しりぞきしに叮つ嚙せな願ねがひの筋すぢ最さい前ぜん嫁よめ女め
にくはしう聞ききました。さても出で陣ぢん
仕しやるなら婆おばが願ねがひはにの初はつ菊きく、今いま
宵よひ此こゝ家やで祝しゆ言げんの盃さかづしてから門かど出でし
や、何なんと嫁よめ女め嬉うれしいかこ、老らうの詞ことばに
初はつ菊きくは飛と立たつばかり氣きもいそ／＼心こゝろ
の悦よろこび穗ほに出でる顔かほは上かみ氣きの夏なつ楓かへ色いろも
なまめくばかりなり。只ただ黙もく然ぜん十じゆ次じ
郎らうけふ初はつ陣ぢんに討うち死しさ覺かく悟ご極ごくめしこの
體からだ、お暇いとま乞ねがひに參まゐりしこ、知しらせ賜たまは
ぬ悲かなしやと涙なみだ吞の込こみ忍しのび泣なみ涙なみだ操さの前まへも立た
上ありば、様さまの御ご機き嫌けんのかはらぬ内うちに

(床本) 尼ヶ崎の段

かための盃、チ、それ、孫も大か
た心せき操は九献の用意しや、十治
郎が初陣の鑑の役はずぐに花嫁、三
國一の悲しみさ知らぬ白齒の孫嫁が
手を引連れて三人は奥の。

M 一間に入りけり。残る者の花一
つ、水上かれし風情にて、思案投首
しほるばかり、やうく涙押さめ
母様にもばや様にも、これ今生の
暇乞ひ、此身の願ひ叶ふたれば、思
ひ置く事更に無し、十八年が其間御
恩は海山代難し、討死するは武士の
習ひと思召し分られて、先立つ不幸
は赦してたべ。二つには又初菊殿
未祝言の盃をせぬが、互ひの身の
仕合せ、わしが事は思切り、他家へ
縁付して下され、討死に聞くならば
さこそ歎かん不惑やま、孝と戀この
思ひの海、隔つ一間に初菊が、立聞
く涙轉び出で、わつさばかり泣き出
せば、はつと驚き口に手をあて。

ア、コレ、聲が高い初菊殿、扱は
様子。アイ、残らず聞いて居りまし
た、夫の討死遊ばすを、妻がしらい
で何させう二世も三世も女夫ぢやと
思ふて居るに情ない、盃せぬが仕
合せさは、あんまり聞えぬ光義様、
祝言さへもすまぬ内、討死は曲も
ない、わしやなんほうでも殺しはせ
ぬ、思ひ留つて給はれま、すがり歎
けば。ア、コレ此方も武士の娘ぢ
やないか十次郎が討死は豫ての覺悟
ばや様に泣顔見せ、もし悟られたら、
未来永々縁きるぞや。エー。サア、
さかう云ふ内時刻が延る。其鎧櫃爰
へ爰へ、アイ、サ早う、時延び
るほご不覺のもこ、聞譯ないさ吐ら
れて、いさしい夫が討死の、首途の
物の具つけるのが、どう急がる、物

ぞいのこ、泣く／＼取出す緋絨の、
鎧の袖にふりかゝる。雨か涙の母親
は、白木に土器白髪のはげ、長柄の
鏡子蝶花形首途を祝ふ熨斗昆布、
結ぶは親子手脚當、六具かたむる
三々九度。合此世の縁や割子札、猪
首に着なす鋤形の、あたりまげゆき
出立ば、さわやかなりし其骨柄。
オ、天暗れ武者振いさまし、功
名手柄見る様な、祝言と出陣を一緒
の盃、サアサア早う、目出度い／＼
嫁御寮と、悦ぶ程猶いや増す名残り
こんな殿御を持ちながら、これぞ別
れの盃か悲しき隠す笑ひ顔、隨
分お手柄功名して、せめて今宵は凱
陣をこ、後は得云はず喰ひしぼる、
胸は八千代の玉椿、散りて云かなき
心根を、察しやつたる十次郎、包む

涙の忍の緒、しぼり兼たるばかりな
り。哀を爰に吹送る、風も持てくる
攻大鼓、氣をこり直しつゝ立上り。
いづれも、さらばと言ひ捨て、思ひ
切つたる鎧の袖、行方知らず成にけ
り。ノウ悲しやと泣入る初菊、母も
操も顔見合せ。ばゞ様、嫁女、可
愛やあつたら武士を、むざ／＼殺し
にやりました、なう初菊、十次郎が
討死の出陣さば知りながら、なま中
留めて主殺しの、憂死恥をさらさう
より健氣な、討死させん爲祝言によ
そいへ盃さしたのは、暇乞やら二
つには、心残りのない様と、思ひ餘
つた三々九度、婆が心のせつなさを
推量しやとばかりにて、初めて明か
す老母の節義、きく初菊も母親も、
一度にごつと伏轉び、前後不覺に泣

叫ぶ、襖押し明け何に氣無う、つか
／＼出づる以前の旅僧、コレ／＼
かみ様、風呂の湯が沸きました、ご
なたぞお這入りなされませと、云ふ
にこなたは、泣顔かくし。オ、そ
れは御苦勞去りながら、年寄に新湯
は毒、後は若い女共、マアお先へ御
出家からいかさま、湯の辭義は水と
やら、左様ならば御遠慮なく、お先へ
參る、と立上れば、三人は涙押包み
奥の佛間と湯殿口、入るや月もる片
びさし。爰に茹取る眞柴垣、夕顔棚
のこなたより、現はれ出たる武智光
ひで。必定久吉此内に、忍び居るこそ
屈竟、只一討と氣は張弓、心は矢竹
籠垣の、見越の竹をひつそぎ鎗、小
田の蛙の啼音をば、こゝめて敵に悟
られじと、差足拔足、窺ひより、

聞ゆる物首心得たりと、突込む手練の槍先に、わつと魂ぎる女の泣聲、合點ゆかずと引出す手負、眞業にあらで眞實の、母のさつきが七轉八倒ヤアこは母人が、しなしたり、残念至極さばかりにて、流石の武智も仰天し、只茫然たるばかりなり。聲聞付けてかけ出る操、初菊諸共はしり出で、ノウ母様が情けない、此の様は何事と縋り歎けば目をみひらき歎くまい、歎くまい、内大臣春永と云ふ主君を害せし武智が一類、かくなりはつるは理の當然、系圖正しき我家を逆賊非道の名を穢す、不幸者とも悪人とも、たまへがたなき人非人、不義の富貴は浮べる雲、主君を討つて功名顔、たさへ將軍になつたさて、野末の小屋の非人にも、お

さりしとはしらざるか、主に背かず親に仕へ、仁美忠孝の道さへ立たばもつそや飯の切米も、百萬石に増るぞや、おのれが心只一つで、しるしは目前これを見よ、武士の命を斷つ及も多いにこのやうな、ひつそぎ竹の猪、突槍、主を殺した天罰の、報ひは親にも此通りさ、槍の穂先に手をかけて、ふぐり苦しむ氣丈の手負妻は涙にむせ返り、これ見給へ光秀殿、軍の首途にくれんぐも、お諫め申した其時に、思ひ留つて給はらばかうした歎きはあるまいに、知らぬ事さば云ひながら、現在母御を手にかけて、殺すま云ふはエ、マ、何事ぞいの、せめて母御の御最後に善心に立かへるさ、たつた一言聞かしてたべ、拜むわいのと手を合はし、諫

めつ泣いつ一筋に、夫を思ふ恨み泣き、操の鏡雲りなき涙に誠あらはせり。光秀聲あららげ。ヤア猪小才な諫言立、無益の舌の根動すな、意恨を重ぬる小田春永、勿論三代相恩の主君でなく、我諫を用ゐずして、神社佛閣を破却し、悪逆日々に増長すれば、武門の習ひ天下の爲、討取たるは我器量、武王は股の紉王を討ち、北條義時は君を流し奉る、和漢俱に無道の者を虐ぐるは、民をやすむる英傑の志、女童の知る事ならず、すさり居らうと光秀が、一心變せる勇氣の顔色、取つく島もなかりけり。折しも聞ゆる陣大鼓、耳をつらぬく金鼓の響き、あはやと見るや表口、數ヶ所の手疵に血は瀧津瀬、刀を杖によるぼひく、立歸つ

たる武智が一子、庭さきに大息つき
親人これにおはするや、云ふも苦
しき斷末魔、見るに驚く母親より、
娘は傍に走り寄り、のういたわしや
十次郎様、祖母様と云ひお前迄此有
様は情けない、お心たしかに持つて
たへ、やいのくを取付て、介抱如
才泣くばかり。光秀わざと聲あら、
げ。ヤア不覺なり十次郎、仔細は
何さ、様子はいかに、具に語れと呼
ばれば、はつこ心を取直し。親人
の差圖にまかせ、手勢すぐつて三千
餘騎、濱手のかたに陣所をかため、
今や歸國と相待つ所に、敵はそれと
も白浪の、櫓を押し切つて陸地に漕付
け、おい／＼都へ馳せ登る、眞柴が
軍勢ごさんなれさ、関をつくつて味
方の軍兵、縦横無盡に確立つれば、

不意を打たれて敵は敗亡、狼狽騒ぐ
を追詰め爰をせんご、戦ふ中後の方
より大音上、眞柴築前守久吉の家臣
加藤正清これにあり、逆賊武智が小
童共、目に物見せてくれんずさ、い
ふより早く太刀抜かざし、四角八面
に切立てられ、また／＼間に味方の
軍卒、残らず討死仕り、無念乍も
只一騎立歸つて候と、息つきあへ
ず物語れば、光秀怒りの髪逆立て、
ヤア云ひ甲斐なき味方の奴原、シテ
四方天田島頭は、さん候、四方天は
目さすは久吉一人と、昨朝よりの一
騎かけ、亂軍なれば生死の程も、慥
にそれと承らず、親人の御身の上、
心にかゝり候故、未練にも敵を切
りぬけ、これ迄落延び歸りしぞや、
此所に御座あつては危ふしく、一

時も早く本國へ引取り給へ、サ早く
く、深手を屈せず父親を、氣つ
かう孫の孝行心、聞くに老母はせき
兼て、アレあれを聞きや嫁女、其身
の手疵は苦にもせず、極悪人の悴め
を、大事に思ふ孫が孝心、やい光秀
子には不慙にはないか、可愛いさは思
はぬかやい、おのれが心只一つで、
いさし可愛の初孫を、忠と義心に健
氣なる、討死でもさす事が、逆賊無
道の名を汚し、殺すはなんの因果ぞ
と。せぐり苦しき老の身の、聲聞き
つけて十次郎。ヤアそんなら祖母
様には、御生害遊ばしたむ、今生の
お暇乞今一度お顔が見たけれど、モ
ウ目が見えぬ、父上母様、初菊殿、
名残り惜やと手を取つて、妹脊の別
れ愛着の、道に引かゝるいちらしさ

母は涙に正體なく、討死するも武士の習ひこいへど情けない。詞十八年の春秋を、又の中に人となり、いつ樂しみの隙も無う、弓矢の道に日をゆだね、今日の首途の其時にも、母様今日の初陣に、天晴れ功名手柄して、父上やばゝ様に、響らるゝのが樂しみと、につま笑ふた其顔が、わしや幻にちらつて、得忘れぬとくどき立て、くどき立つれば初葉もほんに思へば此身ほど、はかない者が世にあらうか、解けて逢ふ夜のきぬぐも、永き名残の許嫁、二世を結ぶの枕さへ、かはす間もなう此様な、悲しい別れをする事は、マどうした罪か情けない、私も一所に殺してたべ死、にたいわいのさ身をもだへ、互ひに手に手を取かはし名残涙

のいさま乞ひ、見るに目もくれ情消え、母も老母も聲をあげ、わつこばかりに取亂せば、流石勇氣の光秀も、親の慈悲心子故の間、輪廻の絆にしめつけられ、こたへかれてはらくはら雨か涙の汐境浪立ちさわぐ如くなり。又も聞ゆる人馬の物音、矢叫びの聲かまびすくM手にとる如く聞ゆれば、光秀聞よりつゝ立ち上り。アノ物音は敵か味方か、勝利いかにと庭さきの、搦木の松ケ枝踏しめくよち登り、眼下の村手をきつこ見くだし。和田の岬の弓手より、追々つゞく數多の兵船、間近く立つたる魚鱗の備へ、千生瓢の馬印は、疑ひもなき眞柴久吉、風を喰つて此家を逃げのび、手勢引具し光秀を、討取るでだてと覺えたり。と云ふよ

り早くひらりこ飛下り、草履摺みの猿面冠者、イデアトひしきも身繕ひ勢ひ込んでかけ出せば。ヤア武智光秀暫く待て、眞柴筑前守久吉、對面せんと呼はつて、三衣にかける陣羽織、小手脚當も優美の骨柄、悠然として立出れば、光秀見るより仰天し、駈戻つてはつたこ睨み。ヤ、珍らし、眞柴久吉、武智十兵衛光秀が此世の引導渡してくれん、觀念せよと詰寄る光秀、中を隔つる老鳥の子故に手疵屈せぬ老女、ノウ久吉様我が子に代るこの母も、天命のがれぬ引そぎ槍、つくきり罪の萬分一、亡る事もあらうか、思ひ餘つた此最後、武智が母は逆礮付に、懸つて無慘の死を遂げしと、末世の記録に残してたべ、それも矢張俵めが、可

愛か故ゆえの罪つと亡はらし。うるさの婆おばに
残のこらんより、孫まごと一緒に死し出し三途さんず、

ハア私わたしもお供ともいたしまする、いづれ
もさらば、おさらばさ、未練みれん残のこさ

ぬ武士ぶしの花はなも實みもある此世このよの別わかれ、
今いまぞはかなくなりけり。操くわの前まへも

初はつ菊くきくも更さらに詞ことばも出いでこそ、あへ亡なき
骸はらを押動おしどうかし、天あまに懂しかれ地に伏ふし

て、歎なげく心こゝろぞいちらしき、哀あはれを餘あま
所に眞柴ましか久吉ひさきち。光秀みつひでに打うち向むかひ、俱とも

に天あまを戴いたかぬ亡君なきくんの弔なぐさひ戦いくさ、今いま此所こゝ
で討取うりとつては、義ぎあつて勇ゆうを失うしなふ道みち

理り、諸國しよこくの武士ぶしに久吉ひさきちが軍功ぐんこうを知ら
さん爲なる、時日ときじつを移うつさず山崎やまざきにて、勝かち

負まけの雌雄ししゆうを決けつすべし、がいかにく
オ、流石りうせきの久吉ひさきちよく云いつたり。我われも

惟ただ在將軍せいぐんと勅許ちやくきょを受けし身みの本懐ほんわい、
一トまづ都みやこに立歸たたちかへり、京洛中けいらくちゆうの者もの共ども

へ地子ちこを許ゆるすも母ははへの追善ついでん、互たがひの

運えんは天王山てんきやうざん、洞ほらか峠たけに陣所ちんじよを構かまへ、
只ただ一戦いちせんにかけ崩くづさん、首くびを洗あつて觀み

念ねんせよ、ホーホー、い、何なにさ、
たさへ項羽かうやうが勇ゆうありとも、我われ又また孫吳そんご

が科術かじゆつをふるひ、千變せんぺん萬化ばんかにかけな
やまし、勝開かちあひ上あるは瞬またく中ちゆうさ久吉ひさきちが

詞ことばはゆるがぬ大磐石だいはんせき、忽たちち廻まわり小栗おぐり
栖すの、土つちに哀あはれを殘のこすさは、知しらず知

られぬ敵味方てきみかた、睨にらみ別わかる二人ふたりの勇者ゆうじや
二世にせをかため別れの涙なみだ、かかれさ

てしもうげ玉たまの、其その黒髪くろかみをあへなく
も、切拂きりばらふたる尼ヶ崎あまざき、菩提ぼだいの種くさねと

夕顔ゆがはの、軒のきにきらめく千生瓢箪ちゆうせいひょうたん、駒こま

のいな、き迎むかひの軍卒ぐんそつ、見渡みわたす沖おきは
中國ちゆうごくより、追々おひたひた入い来る數萬すんまんの兵船へいせん、

威風凛々かふうりんじん凜然りんぜんたる、眞柴ましかも武名假名ぶなかりな
書かきに、寫うつす繪本えほんの太功記たいこうきと、末すえの世よ

までも三重みづゑ殘のこしける。



菅原傳授手習鑑

寺入りの段

豊竹駒太夫
竹澤園太夫

松王首實驗の段

切竹本津太造夫
鶴澤綱太造夫

人形

手御舍春武下男一女子女	子房秀	房戸	才浪
人藤部源藏助郎代り	小太	千代	
習臺松玄蕃藏助郎代り	三	太	
子所丸蕃藏助郎代り			

大吉吉吉吉吉桐吉吉桐	田田田田田竹田田竹	文文文文文	榮榮榮榮榮
七三三三三	七三三三三	七三三三三	七三三三三

この淨瑠璃は延享三年八月竹本座初演に初まり、作者は竹田出雲、三好松洛、並木千柳等の合作で、當時竹本座の衰運挽回のために作者達は天満宮へ祈願を籠め必死の覚悟で各自分擔書下したのがこの淨瑠璃で果然好評で翌年三月まで打續け、竹本座を再び隆盛にした因縁深い名作である、殊にこの淨瑠璃に於て興味を覺ゆるのは『骨肉の別れ』といふ同じ題目の下に各持場を定めて筆を執つた逸話が胎されてゐる。

(床本) 寺入りの段

一字千金二千金、三千世界の寶ぞこ教へる人に習ふ子の、中に交はる菅秀才、武部源藏夫婦の者、いたはりかしづき我子ぞこ、人目に見せて片山家、芹生の里へ所管、子供集めて讀書の、器用不器用清書を、顔に書く子と手に書く子、人形書く子は頭かく、教へる人は取分けて、世話かくぞと見えにけり、中に年かさ五作が息子詞コレ皆これ見や、お師匠様の留守の間に、手習するは大きな損、おりや坊主頭の清書したと、見せるは十五の漣くり、若君はおさなしく詞一日に一字まなべば、三百六十字この教へ、そんな事書かず共、本の清書したがよいと、八つになる

子に叱られて、エ、ませよ〜と指さして、嘲戯かゝるを残りの子供兄弟子に口過す、涎くりめをいぢめてやごま、手ん手に壓尺ふり廻す自然天然肩持つも、傳ふる筆の威徳かや、主の女房奥より立出で詞又コリヤ例のいさかひか、おさましや〜今日に限つて連合の源藏殿、振舞に往てなれば戻りもしれぬ。ほんに〜こなた衆で一時の間も待かれる今日は取分け寺入もある筈、晝からは休まず程に、皆精出して習ふた〜。ソリヤ又嬉しや休みぢやごま、筆より先に譏聲高く詞いろはに、此中御人被下、一筆啓上候べくの、男の肩に堺重、文庫机を荷はせて、惻發らしき女房の、七ッ許りな子を連れて、頼みませうと云ひ入る、

内にもそれぞ早悟り、こちへお入り遊ばせよ、云ふもしこやか、アイアイと、愛に愛持つ女子同士、來た女房は猶笑顔詞私事は此村外れに輕うくうらして居る者で御座ります、此腕白者をお世話なされて下さりよかよ、お尋ね申しにおこしましたれば、おこせ世話してやるよ、結構なお詞に甘へ、早速連れてさんじました、内方にも御子息様がござりますげなが、ごのお子で御座りますぞ。アイこれが源藏殿の跡取りでござります。コレハ〜よいお子様や、外にも大勢の子達、いかにお世話でござりませよ。アイ御推量なされてくださりませ、シテ寺入は此お子で御座りませ、名はなんぞ申します。アイ小太郎と申しまして、腕白者で

御座ります。アイヤイヤ氣高いよい御子や、折悪う今日は連合源藏も、振舞に參られました。これはマアお留守かいな、お待ち遠なら私が呼びにまゐりませう。いえ〜幸ひ私も參つて來る所あれば、其内にはお歸りで御座りませう、コレ三助、其持てきたもの、あなたの傍へあげませ、アツト答へて堺重、へぎに乗せたる一包、内儀の傍へさし出す詞こればマア〜云はれぬ事を、イヤおはもじなむら、此子が參つたしるし此堺重は子達への土産、取ひるめて下されませよ、云はれぬし知れし蒸物煮染、我子に世話を焼豆腐、つぶ椎茸の入たるは、奔走子こそ見えにけれ、詞これはマア何から何まで取り揃へて、御念の入つた事、戻られ

たら見せませう詞イヤモほんの心ばかり宜しうお頼み申し上げます、コレ小太郎ちよつと隣村迄いて来る程に、おこなしうして待つて居や、悪あがきせまいぞ、御内證様、往て參じましょ。と表へ出れば詞かゝ様、私も行きたいと縫り付くを、ふり放し詞増めよ、大きな形して跡追ふのか、御らうじませ、まだ頑是かござりませぬ。ソリヤ道理いな、ドリヤおばがよい物やりましょ、つい戻つてやらんせと、目で知らすれば、アイくついちよつと一走り、跡追ふ子にも引さるゝ、振かへり見返り

(床本) 松王首實檢の段 (切)

M 引連れ急ぎ行く。ゴリヤこちの子に近付きに、若君の傍に寄せ、

機嫌紛らす折からに、立歸る主の源藏、常にかはりて色青ざめ、内入悪く子供を見廻し、詞エ、氏より育さ云ふに、繁華の地と違ひ、いづれを見ても山家育、世話がひもなき役に立す、思ひありげに見えければ、心ならず女房立寄り、詞いつにない顔色も悪し、振舞の酒機嫌かは知らぬが、山家育は知れてある子供、憎体口は聞えも悪い、殊に今日は約束の子が寺入して居ります、さかない人と思ふも氣の毒、機嫌直して逢つてやつて下されと、小太郎連れて引合せと、差俯伏いて思案の体、いたいけに手をつかへ、詞お師匠様、今から頼み上げますと、云ふに思はずふりあをのき、きつと見るより暫くは、打守り居たりしが、忽ち面色

やはらぎ詞扱てく器量勝れて氣高い生れ付き、公家高家の御子息と云ふても恐らくはづかしからず、ハテ扱てそなたはよい子ぢやなアと、機嫌直れば女房も詞何さよい子よい弟子でござんしよ。よい共く上々吉、シテ其連れて來たお袋はいづくに。サアお前の留守なら其間に隣村迄いて來と云ふて。オ、それもよし大極上、先づ子供と奥へやり、機嫌よう遊ばし召され、それ皆おひまが出た、小太郎俱に奥へく、若君諸共闘はせ、跡先見廻し夫に向ひ詞最前の顔色は常ならぬ血相、合點の行かぬと思ふた所に、今又あの子を見て打つてかへての機嫌顔、猶もつて合點ゆかす、どうやら様子がありさうな、氣遣ひな聞かしてと問

へば源藏詞、オウ氣遣ひな筈、今日
村の狸懸と偽り、某を庄屋の方へ
呼びつけ、時平が家來春藤玄蕃、今
一人は菅相、巫の御恩をきながら、
時平に従ふ松王丸、こいつ病書なが
ら見分の役と見え、數百人に追取
巻、汝の方には菅相、巫の一子菅秀才
我が子としてかくまふ由、訴人あつ
て明白、急ぎ首打つて出すや否や、
但し踏込み請取ふや、返答いかにこ
のつ引ならぬ手づめ、是非に及ばず
首打つて渡さうと請合ふた心は、數
多ある寺子の内、いづれなりとも身
かはりこ、思ふて歸へる道すから、
あれか、これがと指折つても、玉簾
の中の誕生と、狐垂の中で育つたこ
は似ても似付かず、所詮御運の末な
るか、いたはしや淺ましやこ、屠所

の歩みで歸りしが、天道のひかへつ
よきにや詞、あの寺入の子を見れば、
萬更鳥を驚さとも云はれぬ器量、一旦
身がはりて欺き、此場さへ遁れたら
ば、直に河内へお供する思案、今暫
くが大事の場所と、語れば女房、待
んせや其松王と云ふ奴は三つ子の内
の悪者、若君の顔はよう見知つて居
るぞへ、サアそこが一かげちか、生
顔と死顔は相好の變る物、面ざし似
たる小太郎が首よもや、價とは思ふ
まじ、よし又それとあらはれたらば
松王めを真二つ、殘る奴輩切つて捨
て、叶はぬ時は若君諸共、先出三途
の御供と、胸をすみたが一つの難儀
今にも小太郎が母親迎ひに來たらば
なんさせん、此義に當惑、さし當つ
たは此難儀、詞イヤ其事は氣づかひあ

るな、女同志の口先で、ちよぼくさ
欺して見よ。イヤ其手ではゆくまい
大事は小事より顯るゝ、ここによつ
たら母諸共、エーイヤこりややい、
若君には替へられぬ、お主の爲め辨
へよと、云ふに胸すゑ、さうでござ
んす、氣よはふては仕損せん、鬼に
なつてさ夫婦は突立ち、互に顔を見
合せて詞でし云へば我子も同然
サア今日に限つて寺入したは、あの
子が業か、母御の因果か、報ひはこ
ちむ火の車、追付け廻つて來ませう
と、妻が欺けば夫も目をすり、せま
じき物は宮仕へと、俱に涙にくれ居
たる、斯る所へ春藤玄蕃、首見る役
は松王丸、病苦を助くる駕乗物、門
口にかき据れば、跡には大勢村の者
つきしたがふて申上げます、詞皆これ

にをる者の子供が、手習ひに參つて居ります、若取違へ首討たれば取返しかなりませぬ、ごうぞお戻し下されど願へば玄蕃、ヤアかしましい蠅虫めら詞うぬらが伴の事迄、身共が知つた事が、勝手次第に連失うと、叱りつくれば松王丸、ヤレお待なされ暫くご駕より出るも刀を杖詞憚りながら彼等逆も油断はならぬ、病中ながら拙者めが見分の役務むるも、外に菅秀才の顔見知りし者なき故、今日の役目仕終すれば、病身の願、御暇下さるべしと、難有き御意の趣き、疎かにはいたされず菅相巫の所縁の者、此村に置くからは、百姓共もぐるになつて銘々が伴に仕立て助けて歸へる手もある事、コリヤやい百姓めら、ごはくごぬかさず共

一人宛呼び出せ、面あらためて戻してくりよと、のつ引させぬ釘鏡、打てば響けの内には夫婦、兼て覺悟も今更に、胸轟かす計りなり。表はそれとも白髪親仁、門口より聲高に、長松よくご呼出せば、オツト答へて出てくるは腕白顔に墨べつたり、似ても似つかぬ雪ご墨、これではないと許しやる 詞岩松は居ぬかと呼ぶ聲に祖父様、なんぢやまはしこくて出て来る子供のぐわんぜなき、顔は丸顔木みしり茄子、詮議に及ばぬ連うせうと、にらみ付けられ、オ、こわや 詞嫁にもくはさぬ此孫を、命の花落のがれしと、祖父が抱へて走り行く、次は十五の涎くり、ぼんよくご親仁が手招き詞さよおれはモウ爰から抱れていのご、甘へる

顔は馬顔で、聲きりくすオ、泣くな、抱いてやらうと千鯉を猫なで親お見違へ下さるなと、断り云ふて呼び出すは、色白々瓜實顔、こいつ胡亂引さらへ、見れば首筋眞黒々々、墨かあざかはしらねども、こいつでないご突放す、其外山家、奥在所の子供残らず呼出して、見せても見せても似ぬこそ道理、土が産した計芋、子ばかりよつて立歸る。スハ身の上ご源藏も、妻の戸浪も朋をすゑ、待つま程なく入来る兩人詞ヤア源藏、此玄蕃が目の前で討つて渡そご請合ふた、菅秀才が首サア請取らう早く渡せご手詰の催促、ちつとも憶せず 詞かり初ならぬ右大臣の若君かき首、ねじ首にもいたされず、暫

くは御用捨立上るを松王丸詞ヤア
其手はくわぬ、暫しの用捨さひまご
らせ通仕度しても、裏道へは數百人
を付け置き、蟻の這出る所もない、
生顔と死顔は相好がかはるなどい、
身代の賽首それもたべぬ、古手な事
して後悔すなま云はれて、ぐつこせ
き上げ詞ヤア入らざる馬鹿念、病ほ
うけた汝の眼玉でめぐり返り、逆
様眼で見やうはしらす、紛れもなき
菅秀才の首追付け見せう。オ、その
舌の根の乾かぬ内に早く討て、さく
切れと支蕃の權柄、ハツと計りに源
藏は胸をすゑてぞ入にける、傍に聞
き居る女房は、愛を大事と心も空、
檢使は四方八方に、眼を配る中にも
松王、机文庫の數を見廻し詞ヤア合
點のいかぬ、先達つて行んだ餓鬼等

は以上八人、机の數が一脚多い、其
伴はここに居るぞと、見告められて
戸浪ははつこ詞イヤこりやけふ初め
て寺、イヤ寺参りした子がござんす
何馬鹿な。オ、それく是も即ち、
菅秀才の、お机文庫と、生地を隠し
た塗机、ざつこさばいて言ひ抜ける
詞なんにもせよ隙さらすが油斷の元と
支蕃諸共つツ立上る。こなたは手詰
の命の瀬戸際、奥にばつたり首打つ
音、はつこ女房胸を抱き、ふん込む
足も、けしこむ内、武部源藏白臺に
首桶乗せてしづく出で、目通りに
さし置き詞、是非に及ばず菅秀才の御
首、討奉る、云は、大切な御首
性根をすゑてサア松王丸、しつかり
と檢分せよと、忍びの鐙元くつるげ
て、虚を云は切付けん、實と云は

い助けんと堅唾を呑んでひかえ居る
ハ、ハ、ハ、ハ、何んのこれしきに性根
所が、今淨玻璃の鏡にかけ、鐵札か
金札か、地獄地極の境、家來衆、源
藏夫婦を取巻きめされ、かしこまつ
たご捕手の人數十手こつこ立かする
女房戸浪も身をかため、夫はもこよ
り一生懸命、サア實檢せよ檢分と云
ふ一言も命かけ、うしろは捕手、向
ふは曲者、支蕃は始終眼を配り、愛
ぞ絶對絶命と、思ふ内早や首桶引寄
せふた、引きあけた首は小太郎、質
と云ふたら一討ちと、早抜きかける
戸浪は祈願、天道様、佛神様あはれ
み給へと女の念力、眼力光らす松王
が、ためつ、すがめつ類ひ見て詞ム
ウコリヤ菅秀才の首打つたは、まが
ひなし、相違なしと、云ふに惻り源

藏夫婦。あたりきよろく見あはせり、檢使の玄蕃は見分の詞證據に、出かしたくよく打つた詞證據に、かくまふた科ゆるしてくれる、イザ松王丸片時も早く時平公へお目にかけん、いかさま、隙ごつてはお咎めもいか、拙者はこれよりおいさまたまはり、病氣保養したしたし、オ役目はすんだ、勝手にせよと、首受取り、玄蕃は館へ松王は、駕にゆられて立歸る。夫婦は門の戸びつしやりしめ、ものをも得云はず、青息吐息、五色の息を一時に、ほつと吹き出す計りなり、胸なでおろし源藏は、天を拜し、地を拜し詞ハア、有難や忝けなや、凡人ならぬ我君の、御聖徳が顯はれて、松王めの眼がすすみ、若君と見定めて歸つたは、天

成不思議のなす所、御壽命は萬萬年悦べ女房詞イヤもう、もう大低の事ぢやござんせぬ、あの松王が目の玉へ、菅相丞様かはつてござつたか、但し首が黄金佛ではなかつたか似たと云ふても瓦と金、寶の華の御運開きと餘り嬉しうて涙がこぼれるハア、有難や尊やと、悦びいさむ折からに、小太郎が母いきせきと、迎ひと見えて門の戸叩き詞寺入の子の母でござんす、今漸歸りましたと云ふ聲聞くより又恟り、一つ連れてまた一つ、こりやマア何と、どうせうと、妻が騒げど夫は胸する詞コリヤ最前云ふたは愛の事若君にはかへられぬ、狼狼者めと戸浪を引退け、門の戸ぐわらり引明れば、女は會釋し詞コレはまア御師匠様で御座

りますか、わるさをお頼み申しますごに居やるぞお邪魔であるに、云ふを幸ひ詞イヤ奥に子供と遊んでゐます、連立つて歸られよ、と眞顔で云へば詞オそんなら連れて歸りましょと、すつと通るを後より、只一討さ切付くる、女もしれ者ひつげつし、逃けても逃さぬ源藏が、又するごに切付くるを、我子の文庫ではつしごうけ止め詞コレ待つた待たんせコリヤごどうやと、刃る及も用捨なく、又切付くる文庫は二つ、中よりばらりと經帷子、南無阿彌陀佛の六字の旗、あらはれ出しはコハいかに、不思議の思ひに匂もなまり、すりみかれてぞ見えにける、小太郎が母涙ながら詞若君菅秀才のお身がはり、お役に立て下さつたか、まだ

か様子ようすが聞ききたいと、云いふに恠びり詞ことばシテ、それは得心ごうしんか。得心ごうしんなりやこそ此この經帷きやうい子こに六字ろくじの旗はた。ムウシテ其許そのもとは何人なんにんの御内證ごないしやうと、尋たづねる内に門かど口ぐちより詞ことば梅うめは飛とび櫻さくらはかるゝ世よの中に、なにさて松まつはつれなかるらん、女房にようぼう悦よろこべ、伴ばんはお役に立たつたぞと、聞きくよりわつとせき上げて、前後ぜんご不ふ覺かくに取亂とらんす、ヤア未練みれん者ものめと叱なりつけ、すつと通とほるは松王丸まつおうまる、見みるに夫婦ふうふは二度にど恠なり、夢ゆめか現まか夫婦ふうふかと、呆おろけて言葉ことばもなかりしが、武部源藏たけべげんざう威儀ゐぎを正ただし詞ことば一禮いちらいはます跡あとの事こと、これまで敵かたと思おもひし松王まつおう、打うつて變かつた所ところ存ぞんばいかに、いぶかしさよ尋たづねれば、オ、御不審ごふしん尤なほ、存知ぞんちの通とほり我々兄弟三人われわれきょうだいさんにんは、めいゝに別わかれて奉公ほうこう、情なさけなや此松王このまつおうは時平公ときへいこうに從したがふ

ひ親兄弟おやけいだいとも、肉縁にくえん切り、御恩ごおん請うけたる昔むかし相承さうじやう様さまへ敵對てきたい、生命せいめいさは云いひ乍はなら皆みなこれ此身このみの因果いんぐわ、何なにこそ主しゆ從じゆうの縁切えんぎらんぞ作病さくびやうかまへいさまの願ねがひ、菅秀才くわんしゆうさいの首見くびみたらば、暇いとまやらんぞ今日こんにちの役目やくめ、よもや貴殿きでんは討うちはせまい、なれども身みがはりに立たつべき一子ひとこなくんばいかせん、爰こゝぞ御恩ごおんの報ほうする時ときと、女房千代にようぼうちやうと云いひ合せ二人ふたりの中なかの伴ばんをば、先まへ廻まわして此この身み替かり詞ことば机えの敷敷を改あらためしも、我われ子は來きたたかこ心のめと、昔相丞むかしあひらうじやうには我性根わがじやうねを見込みこみ給たまひ、何なにさて松まつのつれなからうぞこの御歌おんうたを、松まつはつれないくぞ、世上せじやうの口くちにかゝる悔くはしさ、推量すいりやうあれ源藏殿げんざうどの、伴ばんがなくなれば、いつ迄いつまでも、人でなしと云いはれんに、持つべきものは子こなるぞやと、云いふ

に女房にようぼう猶なほせき上げ、草葉くさばのかけで小太郎せうたろうが、聞きいて嬉うれしう思おもひまじしよ詞ことばもつべきものは子こなるさは、あの子こが爲ためによい手向たむけ、思おもへば最前さいぜん別わかれた時とき、いつにない跡追あとおふたを、叱なつた時ときの其その悲かなしさ、冥途めいとの旅たびへ寺入てらいりと早虫はやむしがしらせたか、隣村となりむらへ行くいふて、道みちまでいんで見みたれ共とも、子こを殺ころさしにおこして置いて、ごうまわ内うちへいなるゝものぞ、死顔しげんなりさも今いま一度ひとたび見たみたさに、未練みれんと笑わらふて下くださんすな、包むすみし祝儀しゆぎはあの子こが香奠かうでん四十九日しじゅうくにちの蒸物むしものまで持つて寺入てらいりさすいと云いふ、悲かなしい事ことが世よにあらうか、育そだちも生うまれも賤いやししくば、殺ころす心こゝろもあるまいに、死しぬる子こは媚めいよしと、美うつくしう生うまれたが、あいやその身みの不ふ仕合しあせ、何なにの因果いんぐわに疮瘡くさまで、仕舞しま

ふた事ぢやさせき上げて、かつげこ
伏して泣きければ、俱に悲しむ戸涙
は立ち寄り 詞最前にナ、連合の身がは
りと思ひ付いた傍へいて、お師匠様
今から頼み上げますと、云ふた時の
事思ひ出せば、他人の私さへ骨身が
碎ける、親御の身ではお道理と、涙
添れば、イヤこれ御内證、コリヤ女
房もなんでほへる、覺悟した御身が
はり、内で存分ほへたでないか、御
夫婦の手前もある、イヤ何源藏殿、
申付けてはおこしたれ共、定めて最
後の節、未練な死を致したでござら
う。イヤ若君菅 秀才の御身替りさ
云ひ聞かしたれば、いさぎよう首さ

しのべ。アノ遁げ隠れもいたさずに
ナ。につこりと笑ふて。ム、ム、ム、
ハ、ハ、ハ、ハ、出かし居りました、利
口な奴、利發な奴、けな氣な八つや
九つで、親に代つて恩送り、お役に
立つは孝行者、手柄者と思ふから、
思ひ出すは櫻丸、御恩も送らず先立
し、嗚や、草葉のかげよりも、うら
やましがる、けなりがる、伴が事を
思ふに付け、思ひ出さるゝくさ、
流石同腹同性を、忘れかれたる悲歎
の涙詞のう其の伯父御に小太郎が、
逢ひますわいのと取付て、わつと計
に泣き沈む、歎きももれて菅 秀才
一間の内より立出で給ひ、我に代る

さしるならば、此悲しみはさせまい
に、可愛の者やと御袖を、しぼり給
へば夫婦ははつと、俱にひたすら難
有涙、次手乍らに若君様に御みやげ
と、松王つゝ立ち 詞申しつ
乗物、早くくと呼はるにぞ、ハッ
と答へて家來共、お目通りにかきす
ゆる、イヤ御出でと戸を開けば、菅
相一亟の御臺所、ノウ母様が我子が
と、御親子不思議の御對面、源藏夫
婦横手を打ち 詞方々々御行衛尋ねし
に、いづくにかか御座なされし。サレ
バく北嵯峨の御隠れ家、時平の家
來が聞き出し召捕りにむかふと聞き
それがし山伏の姿となり、危い所奪

ひ取つたり、急ぎ河内の國へお供な
され、姫君にも御對面、コリヤ〜
女房詞小太郎が死骸あの乗物へうつ
し入れ、野邊の送りいこままん。ア
イミ返事の其中に、戸浪が心得抱い
てくる、死骸を網代の乗物へ、乗せ
て夫婦が上着をされば、あはれや内
より覺悟の用意、下に白無垢廊上下
心を察して源藏夫婦 野邊の送りに
親の身で子を送る法はなし、我々夫
婦が代らんこ、立寄れば松丸詞イ
ヤ〜これは我子にあらず、菅秀才
の亡体をお供申す、いづれもは、門
火門火と門火をたのみ頼まるゝ、御
臺若君諸共に、しやくり上たる御涙

冥途の旅へ寺入の、師匠は彌陀佛釋
迦牟尼佛、六道能化の弟子になり、
賽の河原で砂手本、いろは書く子を
あへなくも、ちりぬる命是非もなや
あすの夜誰が添乳せん、らむうぬめ
見る親心、合つる死出の山げこえ合
あさきゆめみし心地して、跡は門火
にゑひもせず、京は故郷と立別れ、
鳥邊野さして連歸る。



心中天網島

紙屋内の段

紙屋内の段

豊竹呂太夫
鶴澤つばめ太夫
豊澤仙糸

切 竹本土佐太夫
野澤吉兵衛

人形

紙屋治兵衛 吉田榮 三
女房おさん 吉田文五郎

この淨瑠璃は文豪近松門左衛門か一代の傑作と謳はるゝ名作で享保五年十月十五日の明け方大阪網島大長寺で情死をした小春治兵衛の件をすぐさま脚色して十二月六日初日で竹本座にかけたもので以來心中物の白眉とされてゐます。天満の紙屋治兵衛は妻子ある身ながら曾根崎の細の國屋小春と深く契ります。兄粉屋孫右衛門は是を憂へて侍姿に身を扮し河庄に到り小春に遭ひ二人の仲を割かさうとし折から一丁目でも小春に會ひに来た治兵衛にも意見を加へます。小春は女房のおさんの依頼の

状によつて義理に挟まれ心ない愛想づかしをいひます。治兵衛の懣敵太兵衛が小春を身請けするこの噂を聞いておさんは衣類を質入してまで所要の金を融通し、治兵衛に顔を立てさせんとします。舅五左衛門はこの体を見ておさんを連れ歸ります。治兵衛は小春と網島大長寺へ往き情死を遂げるといふ義理と愛に涙を絞る世話物の粹であります。

(床本) 紙屋内の段 (中)

福徳に天満神の名を直に、天神橋と行通ふ、所も神の御前町いさなむ業も紙屋に、紙屋治兵衛と名を付けて早振程買に来る、神は正直商賣は、所からなりしにせなり日脚も傾くまがり辻、横町から身すむら太兵衛、

江戸屋	太兵衛	吉田玉	幸
傳	界坊	吉田扇	太郎
紀伊國屋	才兵衛	桐竹紋	太郎
粉屋	孫右衛門	桐竹政	龜
娘	おすへ	吉田榮	三郎
おさんの母		吉田小	兵吉
舅	五左衛門	桐竹門	造
紀伊國屋	小春	桐竹紋	十郎
悴	勘太郎	吉田玉	丸
丁稚	三五郎	吉田玉	徳
五貫屋	善六	吉田玉	市

ア、治兵衛殿内にか、イヤ内にそふな、サア金受取らふ、こんな贖金は入らぬ、正眞の金返して貰はふサ、今戻せ〜こ上り口に大あぐら、ヤコレ、太兵衛そりや何云ふのじや、全体宛名の違ふた金、覚えなければど其場の張合、お侍の世話で二十兩はすましたじやないかが、其時實様改めて、サイノ、二十兩に違ひはないがマよふ似た正眞には見ゆれど、一兩も遣はれぬ、コレ、是を見や、ヤモモんこの胸脈けさ問屋の仕切にやつたら、贖金のしりが破て、此太兵衛迄がうたがはれるわい、治兵衛悪いぞや〜エ紀伊國屋の小春さ、くさりついた二人が仲、揚代にせがまれ、ソレ貴様さちりは〜して居たおれが性としてイヤモ氣の毒でなら

ぬじやによつて、取替てやつた貳拾兩、ハ〜ア〜りや何か侍めさ云ひ合せ、此太兵衛をやつたのぢやな、イヤヤやつたのじやなア〜〜マめんよふ合點の行ぬさぶじやと思ふたごいつもこいつも悪いやつらじやなサア其侍に逢ふ、治兵衛かたりめを爰へ出せよ、そこらあたりへ當り眼、コレ太兵衛殿お侍には及ばぬ、一体この貳拾兩は清水の浮無瀬で石町の隠居坊主に思ひも寄らず借つた金、名を宛白紙でやつたが誤り、が太兵衛さいふ名宛ではサア借らぬ物がなぞ返した、イヤイヤノ、コレ、贖金で返せさいふ、相對はせんぞよこんな恐ろしい言事せずさ、五器提ておれが門へ立てやい、へ〜ん江戸屋の太兵衛は大金持ちやわい、臺所

の餘り物犬の五器の分でも四五人は
樂に喰へるわい、エ、こんな事すな
やいと、足で蹴返す賀金の、包も切
れる腹立涙、ム、そうぢや石町の
借座敷隠居坊主といふたも曲者、引
すつて来て面張れさかけ出すを、女
房引留めア、コレ、治兵衛様も是程
に手を管て仕込んに仕込んだ悪だく
み、石町の借座敷に、今迄何のうか
く居やう、コレ氣をしづめて下さ
んせさいはれて、詮方なく計り、途
方にくれたる折からに、くれぬ門で
もこぢつけるちよんがれ坊主の錫杖
ふり立エ、歸妙頂禮ごうが如來さん
ま、ヤレ、皆様聞いてもくんな、
あまりかつへて向ひ婆様ちよつさゐ
たれば後生願ひでお前の内からくわ
つくと後光がコリヤ、又あんたる

うるさい事じやに。パイ、パイ、
くく、エ、時々時々あた聞こもな
い、返りや、ヤレ、くく、けんご
な、かみさん、けん、く、いはすき、
おらが顔見て御亭主、我等が顔を
ばちよつと御覽じ、ちよつくら
ちよつと、御覽じ、何ぞ思案の種に
もなるかい、パイ、くく、く、ヤア
わりや此間の坊主め、よううせたな
アと走り寄り、胸倉さつて引居れば
マ、コレ、親方、コリヤどうす
るのじや、私は長町の乞食坊主、
夫を内へ引すりこんでエ、聞へ
た、コリヤ何かへ内で諷はして聞く
氣かへ、ム、諷ひませふ、へん
くく、是は此頃大評判色里も
つばらちよんがれ節、新物のコレ始
り、ヤレ、くく、エ、歸命頂禮お

かたさんやんれ、ヤレ、くく、皆様
聞いてもくんさい、花の難波の新地
の小春に貧乏紙屋の治兵衛がなづん
で悪性通ひが杉原紙で節季は斷り仕
切いのべ、紙得意は塵紙若い美濃紙
内にや小半紙一そくならず二束三文
にまけてしまつたハ、着類きそ
げも茄子の淺漬ぬかみそ臭い、内の
お嬢にやあいそもこつそり、盆も正
月も小春が方へ忍び紙さばコリヤ又
あんたるうるさいこつた、笑止なこ
つだにちよんがれもんがれ、くく、
パイ、くく、パイ、くく、やれ、く
く、おやま狂ひに男はぬれ紙小春は
青土佐、内儀はけつこな阿房のか、
紙、是が今橋うはさの書置、唯へま
したるちよんがれ坊主も元は随分お
さなしもんだが浮世捨たるずんべら

ぼうのぼんぼうぼく坊主も舐れて
が、折ました、プイ、フウプル
くくく、ヤイ、そりや客さ偽
り、小春を浮無瀬へ連れて来て、石町
の坊主客になり、我難儀を見て貳拾
兩さいふ金をかじ、宛名に及ばぬこ
白紙の一札も頼もしそふに取つて置
き思ひも寄らぬ名宛は太兵衛、よふ
もくたくなんだな 有り様にサア
ぬかせ、ご取付くをふり放しエ、コ
い、親方、下地の破れに又破る
はいのム、衣が、何と云はんす、此
わしに、二十兩の金借つた、ム、
イヤこいつは受目じやわい、ハ、
サアそんなら返して貰はふく
くマ、何ぢやいけつたいの悪い、
宿なしのちよんがれ坊主をつかまえ
て、覚えもない貸主呼ばり、エ、返

したか返せ、貸た覺はごんせんとぞ
鼻も動かぬ白化しらにせ、亂れれだ
れの腕まくり、はせる衣のごぶ色も
破れかぶれさ見えにける、太兵衛氣
味よく尻打叩き、コリヤ治兵衛、せ
りふが濟んだら金返せ、但し代官所
へ行たいかアノ爰な泥棒めと、立蹴
にござと蹴られても證據なければ無
念をこらへ、拳貫く齒さしみ齒ぎり
スリヤござあつても此治兵衛をム
代官所へ引ずつて行くサア、
うせいと取にかゝる二人を突のけ走
りか、つて戸棚の脇差抜んとす、馳
け寄りおさん抱き留めム、道理ぢや
くがマア待て下さんせ、お前が短
氣な事をして、跡に残つた二人の子
供、私は何とぞなるぞいの、ア、イヤ
くく放せ、逆立牛鬮、治兵

衛待早まるなと奥より出る孫右衛門
脇ざしをもぎ取て、最前から何も彼
も皆聞いた、此場で太兵衛ごんさや
らさ、アノ坊主めご打放しや二十兩
の白紙の譯が立かよ、ソレ其様に腹
立させ、疵付させて事にする仕打は
これまで何ぼうも有事ぢやわい。夫
でもあんまり、サアよいと事おれに
任しや、ハテマア下にゐやいの、
ソレおさんこの脇差を戸棚へこ、落
付く詞に落付くおさん、天の岩戸の
戸棚へ銃マどう濟む事ぞと常男の胸
はもた付く其所へ小春が親方紀伊國
屋才兵衛内を覗いてへエ、御免や
一寸お尋ね申します。内方に江戸屋
太兵衛様、江戸太様はお出なすてや
ござりませんか、もいたつてほんホ
ニ、さいふお人ム、太兵衛様爰に

かいな、モ一逼と尋た、お前はマアぬつペリとした顔付、コレよふ駈落をさしたの、サア此二十兩返しますか埋だ小春を出して貰ふ、ヤイ〜
 才兵衛〜わりやマアれまぼけては居ぬかよ、ソリヤ一体何の事ぢやい、エ何の事〜こはテモマあつかましい、代物ぢや、きつとした證據がござんすハイ書置があるわいの書置がサア〜は読んで見やんせモ太兵衛が側へ突付れば何といふ、スリヤ是見りや知れるかい、小春が書置さぬかしや、マごこそ胸にこたへふと、したり顔に押開き、エ何々恥しながら書残し候是迄厚ふお世話になり候身に候へ共いさしいお人の顔立ち申さず、是非なく駈落致しまぬらせ候エ、いま〜しいげ

んさいめじやなア、今迄紙治様と深ふお云ひかはし深ふ〜へ〜深ふお云ひかはし遊ばしたのヒ〜エ何ちや今迄紙治さんと深ふ云ひかはせしはマ、待よ、せしは〜じやちつとけつたいなゼエ、深ふいひかはせしは皆嘘にて候ヤア〜
 阿ハ〜、誠はほんまに太兵衛様が可愛い〜にて候ム〜
 傳海、貴様アノ太兵衛様といふ客知つて居るかい、待なはれや、何でももう聞いた様な名じやがエ〜こふつと太兵衛様〜ナア太兵衛様ムイア返事して居るお前ぢやひな、ム、ほんに私かいな、えらいおかしいなアホ〜、しかしマアそんなら其氣で楽しんで讀にやならぬ、エ〜ごこやらじやチャット爰ぢやエ、是迄

難面あたりしは、眞實の有、太兵衛様に針を持たして何じやいな、此太兵衛に針持してごうするのじや、わしや縫物はしらんむなチ〜太兵衛様ソリヤ取り様が違ふてでソリヤ張を持たしさいふ事ぢやエ成程そふかヤ是は下拙が讀違ひ大きにはかりさん、エ、眞實の有太兵衛さんに、張を持し請出されてほんくの女夫エ〜ホ〜、傳海聞いてくれほんくの女夫ぢやさいやい、エ〜ソリヤ誰さいな、私さじやひなアノおまはんさかへ、そふじやがなチ、嬉しいチ、可愛〜
 シモタ大事の状しわだらけにして仕舞ふたドウ〜、皺を延してやりませふ〜ハア〜シイ〜
 ム、何ちやほんくの女夫になり末

永ながふ添そ通とほしたき願ねがひにてわざささ難た面ら致うしらりせるまるるヤア／＼／＼こりや風かぜが變かつて來きたま、俄に肩かた入い稻いねのぼし色いろ事ことしの氣きになり、太た兵へい衛ゑがぞく／＼傳つた海うみはほくそづく、イヤコレ親おや方かたどううやら甘あま臭くさい文ぶん句くじやな誰だれが聞きいたい、サー／＼早はやふ讀よみでマー聞きかしやいな、ハレせはしいなハレせはしやのごうやら胸むねがぞき／＼とチ／＼けさは身みがぞうさして來きた、エー今いま迄まで紙かみ拾あつ様さまに云いふたは皆みな嘘うそ、誠まことは主ぬしに添そひたい心こころなれど、所よ登のぼ添そふては下くださるまいさ思おもひ諦あきらめ私わし計けり死しぬる心こころに覺さ悟ご決けつめり、可あ愛いや私わしゆへ死しぬる心こころに成なつたかいエ、可あ愛いや／＼／＼

／＼若もしも願ねがひ叶かなはずばこの品しなを形かた見みご御ご覽らん下くだされせめては御ご回へい向こう頼たの上じょうげらせらるる。南なん無む阿あ彌あ陀だ佛ぶつ／＼エー可あ愛いや／＼大おほ聲こゑ上あげすり上あげ／＼赤あか子この時に泣なた儘二十餘年よねんと六七年むくしちねん溜たまり涙なみだ御ご道だう理り様さまやと傳つた海うみがし／＼かんでやる賞あづかひ泣なき身みをもむ太た兵へい衛ゑが袂たもとより落おち散ちる状を孫まご右みぎ衛ゑ門かど拾あつひ取とれ共ども知しらばこそ、コレ才さい主しゆ、わしや小こ春はるが書かき置あ見たのでやくが差さ込こみしんき、アイタタ／＼コレ／＼傳つた海うみ坊ぼく貴き様さまの世よ話わにして下くださつた、元もとは是これからチ／＼そふじや／＼太た兵へい衛ゑさんコリヤ手て延のびにしたら死しぬるぞへ書か置あにかいて有ある、お前まへの存ぞんじの所ところは心こころ當あたりがあるかへサア其その心こころ當あたりはムいまだも木きの伊いじやコレ／＼傳つた海うみ老らう

も來きておくれサア早はやふ／＼と後あと先まへ委あや細さいかまひなくあたふた出るを孫まご右みぎ衛ゑ門かど、門かどの戸かどびつしやり、詞ことばアイヤコレ、太た兵へい衛ゑさんちよつさ待て貰ふ、ヤイ／＼實まこと主しゆめ用もちむ有あるこへ出いいさ云いはれて俄に胸むねぶるひもた付つ膝ひざをふみ／＼て詞ことばハイ、何なににも御ご用もちはない答こたじやがヤイ我われが名なは傳つた海うみといふなエーん夫それが何なにぞ致いたしたかへ、コリヤ清きよ水みづの浮う無む瀬せで坊ぼく主しゆ客きやくになつたわ併ひしちやな、アノ太た兵へい衛ゑさん一つで有あるふがな、イエ／＼めつそうな／＼太た兵へい衛ゑさんとやら、つひに見た事もない人ひと、チ／＼其その見みた事もない太た兵へい衛ゑがコレ傳つた海うみ坊ぼく貴き様さまの世よ話わにして下くださつた元もとは是これからチ／＼そふじや／＼太た兵へい衛ゑさん手延のびにしたら死しぬるぞへさうぬは又また何なにで受う

答ひるゐだ、サア夫ればさはまだ
 見せる物有るさ、拾ひし手紙押
 し開き、一寸申上候、此間浮無瀬に
 て給りし十兩は最早此間の勝負にな
 りて、彼は預り手形の義首尾よく参り候は
 い、又々十兩御貸し下さるべく候、
 直に申すも如何ぞ御願斯の如くに御
 座候太兵衛様、傳海より、何と是
 でもあらがふかき、問ひ詰められて
 文句も出ず、落した太兵衛は後日の
 難儀と、取にかゝるをまつかせさ入
 身に成つてかつぎ投げ支ゆる傳海肩
 車、打すねられて二人はひいひい心
 地よくこそ見ぬにける、孫右衛門猶
 二人をねめ付けかたりひるゐだ白紙
 の質筆うぬらび工み有り様にサアぬ
 かせ、ぬかさにや箒と、振上げればア

申すぬかしますぬかしますぬか
 衛さんに頼まれて、坊主客になつた
 わ、用水桶の底抜ハイ、みづからぢ
 やわいな、チ、そふで有ふよう
 いふた、スリヤこれなりに濟してや
 るイヤナニそこなやつし殿も重ねて
 治兵衛に云ひ分はないかい、イヤモ
 勿体ない、是迄小春がなびかなんだ
 色の意趣エ、ほんにやれ、戀程せ
 つないものはない、コリヤ二人なが
 ら顔を上げ、ム、ハイ、儕等マア
 よい獄門頭ぢやな、ム、ハイ、よふ
 似合ひますかいな。アエ、たわけ
 め、小まごご云はずさ早く歸れと二
 人を引立て孫右衛門。門へ突出し詞
 イヤナニ小春の親分さん貴様達にや
 言分ない、心任せにいんだ、ハイ
 始めて参じましておやかましく

存じます、もうお暇さ表に出サアコ
 レ、太兵衛様遅い小春が死ぬるわ
 いな、早く身受を、アイノ夫もよふ
 合點して居る、シタが大金持の此太
 が、この様は何事ぞい、傳海、太兵
 衛様エ戀故ぢやなアと、何をいふや
 らたましいと、俱にぬけたる腰の骨
 互にいたわりいたわれ、ちんばち
 が。太兵衛様よつ程惚られさつ
 た、傳海ごえろうごやされさつた、
 仇口交りそろ、木の伊をさして
 歸りけり、道引違へいさせきと、お
 さんが母は内に入りコレ孫右衛門、
 こちの親父五左衛門殿、年寄の氣は
 いらく、早ふ安否を聞きたいと、昔
 堅氣でやかましい、ム、御尤で御
 座ります、イヤモ、治兵衛の事は
 御安堵なされ、小春が事も何も斯も

皆埒がわいて仕舞眞人間になりまし
たわいのさ聞て母親打ほ、笑チ、そ
れば嬉しい、忝いが逆も心落付る爲
親父殿へ面晴にさうぞ誓紙が書いて
欲しいわいの、イヤモ何が扱何ん時
でも書きませふと、さうくくく
くご書認め、母が前へ差し出せば
手に取つて讀下し、ム、誓紙はたし
かに請取ました、サア孫右衛門連立
つて行ませふム、ホンニついでに孫
も一緒に連れて逝ぬ、早う歸つて親
父殿に安堵させたい、是も十夜の如
來のおかげ、詞是からなりさお禮の
念佛、エ、南無阿彌佛陀くくも
口こもる心ぞ直に佛なり。

(床本) 紙屋内の段 (切)

門送りさへそくく治兵衛は傍に

あり合す定木を枕轉寢のあたる炬燵
の小はる時まだ曾根崎を忘れずかこ
退るふさんの内さへも涙にしめる其
風情おさんは呆れつくく顔打守
り打守りエ、餘りじやぞ治兵衛様
夫程名残が惜なら誓紙書ぬがよござ
んすなぞにお前は其の様に私が憎ふ
ござんすへ、ア、コレくソリヤま
あ何を云やるぞいの子までなした二
人が中にイエく憎いそうなく憎
ましやんすが嘘かいなア。おさ、し
の十月中の亥の子に炬燵あけた祝儀
逆ソレ處で枕ならべて此方は女房の
懐には、鬼が住か蛇が住か夫程心残
りなら泣しやんせく其涙が蜷川へ
流れたら小春が涙で呑みやらふぞ。
餘りむい治兵衛様何ほお前にどの
様なせつない義理がある逆も二人の

子供お前何共ないかいなご心の限り
くごき立恨み歎くぞ誠なるチ、尤
じや誤つた悲しい涙は目より出無念
な涙は耳から成共出る成らば云すこ
こ見すべきに同じ目よりこぼる涙
足かけ三年が其間露程もり入氣せぬ
そなたに云も恥しなから此間も曾根
崎で残らず聞ぬた小春めむぶ心中。
今ご云今夢も覺め思ひ切てはるるけ
れギアノ太兵衛めが急に身請をする
この噂退て十日も立ぬ中請出さるゝ
義理知らずの畜生めが事は心残られ
ご間屋中の付合にも金の工面に盡し
故小春を退たの何んのさてえしれぬ
やつらが口の端にかゝるが無念な口
惜いとサ思はず涙をこぼしたはいの
ふエ、そんなら小春様はお前に、あ
いそ盡し云てアノ太兵衛が所へ行く

苦かへハテきよま／＼しい其聲はい
 のイーエイナアそんなら小春様は生
 て居る氣じやない死なしやんすはい
 な／＼ハテ扱何ば發明でも遠は町の
 女房じやアノふ心中者が何の死ふぞ
 イエ／＼そふじやござんせぬ小春様
 にぶ心中は芥子程もないけれど日外
 よりお前のそぶり何を云てもうか
 く／＼こもし悲しい目を見よふか案
 じ過して小春様へいそいと思わん
 す治兵衛殿の爲じや程に思ひ切て下
 さんせと書くごいてやつた文引かれ
 ぬ義理と合點して親にもかへ戀な
 れど思ひ切るこの嬉しい返事は程眞
 實な心で何の太兵衛の所へ行かしや
 んしよ請出された其儘に死る覺悟に
 違はない小春様を殺しては、此さん
 が義理立すごうぞ命も助けたい思案

して下さんせひよんな事ごうせうと
 始めて明す女房の誠ムウそんならア
 ノふ心中と見せたのはそなたの頼か
 アイナアホイそりややつぱりおれを
 大切からハアそうさば知らず今迄も
 義理知らずの畜生のと恨だ心が恥し
 いアコレ夫云手間でこな様往てごふ
 ぞ殺さぬ様にしてしんぜて下さんせ
 いな／＼ハテ小春が命助かるは百五
 十兩せめて半金成り共手附に渡し取
 留るより外はないが何を云ても金の
 工面に盡きた此身ノウ仰山なそれで
 濟なら安い事と立てたんすの小引出
 し明て取出すないまぜの紐付帛紗お
 し開き差出す一包、治兵衛取上びつ
 くりしコリヤコレ小判五十兩ごふし
 てそなたがサア此の金の出所も後で
 語れば知れる事此晦日に岩國の仕切

金にさいかくはしたれども、それは
 兄様と。だんごうして、商の尾は見
 せぬはいな小春様の方は急な事ソレ
 其小判五十兩と残りば。わしがと。
 かい立つて、あけて取出す染小袖兼
 て、斯きは白袂裏黒羽二重も色かへ
 ぬ淺紫の糸目結びつた鹿の子もお
 しげなふ子供のものもかい集め内端に
 見ても甘兩よもや貸さぬと云ふ事は
 ないものまでも、ある顔に夫の恥さ
 我義理を一つに包む風呂敷の内に情
 ぞ籠ける私しや子供は何着あても兎
 角男は世間が大事身請して。あの太
 兵衛に一ぶん立て下さんせと云へど
 いらへも涙聲チ、過分ぞや、忝い手
 附渡して取留請出して圍て置か内へ
 入るにしてからがア、そなたは何と
 と云さして打しほるればア、何のい

なア心案じて下さんすなへハテモ子
供の乳母が飯焚か面倒ながら眞實の
妹くく持つたと思ふて。云
ふ胸まで突かける涙呑込くで夫に
立ち立る貞節は傍で見方目もいぢらしき
エ、何にも云ぬコレ女房共親のぼち
天の罰佛神の罰は、當らず共マ女房
の罰が恐ろしい、赦してたもさ斗に
て、伏拜む手を、アコレ且那どの
何しやしやんす勿体ない勿体ない事
して下さんすないなモく手足の爪
を放しても皆夫への爲じやもの後の
間ではせんない事サアく早ふと三
五郎呼出し渡す風呂敷懐へ金押入
れて立ち出る治兵衛殿お宿かさ門口這
る五左衛門チ、是ははしたり舅殿マア
よふ御出も夫婦はうちんく三五郎が
脊負たる風呂敷見付てコリヤあほう

め其包みごこへ持つて行く又質屋へ
うせるのかこつちへおこせま引たく
られびつくり拍子拔参りの宵に知れ
たる心地にて一間の内へ入舅は猶も
興に乗つて、大方斯であらふと思た
はい着類着そげを質にまげてお山狂
ひに仕上げるのじやなお山狂ひに、コ
リヤヤイ女郎の誠きな鬼瓦の笑ひ顔
まはない物じやぞよサア手短におさ
んに眼やりや女の子は母へ附が世間
の大法ジャガおすえはさつきに、祖
母が連れて戻り此誓紙をひけらかし
ておれに渡した。ア、えらい様でも
さすむは女こんなで行のじやないぞ
よサア誓紙の替りに去状書。あんだ
らくさいと引裂く治兵衛が顔へ打
付てお上にどうさり大白なり。おさ
んは聞兼コレも様ソリヤお前聞へ

ませぬはいなくこちの内の身体の
おさるへたのも皆お前からおこつた
事ないもせぬ銀山にかいつたさ云て
三十兩借五十兩借あげくには其銀山
がつぶれたさやら元も子もないよう
にして仕廻くやんしたぞへ男氣な治
兵衛殿舅の事なり云出せばこつちも
恥と證文も残らず戻し濟さしやんし
た其時にはコレ此怖い顔に涙をこぼ
して悦ばしやんした事を、おまへよ
もや忘れはさしやんすまいがのお前
又主の悪所通ひも元の起りはこなさ
んから起つた事れつきさ仕方て貰ふ
た身体何して金が減たぞご本家の不
審が立つた時ハイ舅殿に取れました
ま鼻毛らしう云れもせずさ口へ出し
て云こそさつしやられ志を推量し
て初手の間の茶屋通ひは世間へ聞へ

にもさつしやる事かさほんにやれ
く行しやる度く。わしや後か
ら拜んで居た拜んで計りゐたわいな
く其大恩を打忘れあほうじやのイ
ヤたわけのさ假初にも勿体ないこら
へて下されこちの人。さ、様逝で下
さんせさ。なだめつ呵つ、兩方へ我
身一つの。せつなきつらさ思ひやら
れて道理なる思ひは同じ。うき思ひ
身の云譯に紐の國屋小春はこゝへ來
かゝりて様子ありげな内の体逢ては
いかゞ用水の蔭に隠れて聞居たる
こは知らずして治兵衛は手を突御立
腹の段は御尤おさんが申は皆むだ
事私心に存ぜぬ事此儘濟せて下さ
れと詫れど聞ずイヤならぬはい。何
にも云ふ事聞事ないはい。おさん戻
せば事はすむが併拵へおこせし道

具衣裳改めて封付んご立上ればおさ
んは驚きア、コレさ、様衣裳道具も
揃ふてあるエ、モウ改めるには及ば
ぬさかけふさがれば、つき飛しぐつ
ご引出しコリヤごふじやご一重二重
引出しの數もありだけ押入迄底を敲
いて五左衛門口あんぐりご明入物指
にもさゝれず言葉さへ屢し呆れて居
たりしが治兵衛ごつくご心を定めコ
レ身殿此五十兩は女房おさんが衣裳
道具のかはり不足にはあらふが持て
ござれエ、ハ、ハ、ハ、そふはかいへ
い、い、そふはかいハ、ハ、ハ、イヤ
又ごふ云ても大身体じやつてのがこ
のしだらを見るからは、いよ、娘
は連れて歸サア、うせふご引立れば
マア、く待て下さんせ、いなアモ
あ、云ひ出してはきかぬさ、様わた

しやマア歸ります云迄はないけれど
勘太郎も事、くを頼みますぞへ朝飯
前に忘れずごなナソレ桑山の丸子
く吞して下さんせへム、氣遣ひ仕
やんなマア思ひも宿らぬ今此時義ご
んご心も落付れご。そんなら暫く別
れて居よ身殿も娘の事まんざらむご
ふもさつしやるまいツイまた戻りや
る様に成ぞいのアイ、く、く、く、な
コレ申治兵衛様必ず短氣の出ぬ様に
エ、小面倒な暇ごひサアきり、歩
めご引立る聲に目覺す勘太郎、く、様
かゝさんのふを聞捨に後に見捨る子
を捨る數に夫婦の二股竹永き別れご
ハア出て行、しほれ、く、後影見送
り、く、小かげより小春は内へ駈入ば
ヤアそなたは爰へごふくてご尋る内
にも稚子がかく様のふさしたふ子を

見るに二人はいさゞ猶ひくすをれ抱しめ透せば。すやゝ稚子を。いぶりながらもくゞき言エ、ツウさもふ何から云ふぞ治兵衛様此間も曾根崎で相想盡しな悲しい別れ思ひ切つてはゐるけれどあの太兵衛に身うけしられては所詮生てはいぬ覺悟此世の名残りに。たつた一目さ來事は來ても折あしく立聞した内の様子あれ程眞女なおさん様にあふぎの別れさせますも皆私から起つた事コレ勘忍して下さんせゝサイノ眞實な入譯を聞ば聞程此身の誠りあの様な女房が三千世界にあらふかいのふ此言譯にはそなたもおれもスリヤこな様も覺悟極てエ、忝ふござんすま抱しめたるないじやくり胸まゝに云せけり高砂や此重箱に餅入て片言まじり。

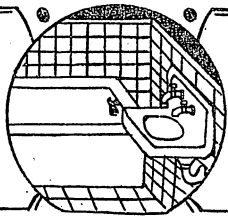
あほふの三五郎机に乗し三ツ具足兩手に抱へ二人が眞中サアゝゝ氣疎い物に成たじやないかへアノさつきにおゑ様云んすにはコリヤ三五郎よおれが留守になつたら大かた小春様がござんす程に。そふしたらアノ旦那様さアソレいまのム、祝言さすのじや我を頼さ云ておかんしたはいな。そこでおれが思ひつきじや花瓶の松に鶴龜酒の取りたがなかつたさかいで水を銚子に入れて來た媒介役のエ、おれ様じやコレ禮には好の虎屋まんぢうコレ今からあほふ云んすなへゝサアゝ早ふ呑んせゝゝハア二人ながら泣んすアゝコレないのゝようござんすかハア扱はコリヤ嬉し涙じやのアイノこな様が云んす通り嬉し涙がゝゝこぼれたは

いのみ。去ながら治兵衛様さ祝言してはなごふもおさん様へエ、何のマア濟ぬ事はござんせぬはいのおゑ様は出しがらに成て是ほご味い餘節をお前にやらんす事じや物志を無足にせずさきりゝ脊でさゝんせいのおゝいのみム、コレヤ三五郎が云通り祝言じやと思へば義理もあるが、互に末期の水盃ムさらばお酌を申さふかい。涙ながらに取上る酒さ水さかはらけの土になる迄葬禮の本花や鶴龜の蠟燭立も消る身と思へばいさゝ胸せまるサアゝ目出なつて來たワイエ、誰ぞマア謔唄ひいでなご見やる外面へ四ツ子の墨の衣に、わらじがけ安養寺尼寺常念はつちソリヤコソ來たいさあほふはかけ出抱く這入のを顔見て恟驚ヤお末

じやないか。わりや一人戻つたか。そふしてマアかはつた風をしておるなアイぢいさん。こんな美しい着物仕てもらふた、餘り此べは白いによつて何やらたんと書て下さつた此書たのを。さゝ様や伯母様にちやつて見せてこいと云て祖父様が門口迄つれて来て下さつたはいのふヤア。二人は立寄てあたふた脱す墨染の下には何か白無垢におさんが筆のちらし書、エーナニく涙ながらに一筆しめしまいらせ。候。エーアハ、さき程父様連立歸られ、候。節小春様御怒げせの姿、確に見請候へ。共御存の譯合故御目もじも成りたく書残し申上まいらせ。候。ア、コレ治兵衛様一寸マアわたしにも讀まして下さんせ。いなア、エーナニく。さかく連合の命を命けたさ小春様へわりなきお願ひ申上候。ひしにお聞届給はる嬉しき海山にもかへまほしく何ぼう忝ふ存上ま

いらせ。候。エーこの御恩を送り候には、末々お二人を御夫婦ごなしまいらせ。候。よりほかなくも存じ候。エーその上父様の眞實をき、我がこそはこれ迄の縁さ諦めまいらせ。候。又お末こそはこなた乳にて育て申べく候。勘太郎が事を小春様へくれぐれも頼上まいらせ。候。エーコリヤマア何の事じやぞいのなソリヤ聞へませぬはいなおさん様。私しやお前からお禮請る覺はないコリヤマア私を術なむらすかいなく。コレイナアコレ治兵衛様。ごうごまあおさん様を呼戻して下さんせ。く。ご立たりあたりうる。く。譯も涙にくれ居たる治兵衛は、又も引よつてエーナニく。舅五左衛門申入候。エーアの舅親父の恩知すめうぬがるくな事書おる物でア、コレそのやうに腹をたてす。一寸呼でみやしやんせ。く。なエー。さんさもう面倒い。エー舅五左衛門申入候。

化粧タイル
水道衛生工事
洗面、浴場、
水洗便所設計
汚水浄化装置
特許無臭便所




西區立寶堀北通一丁目
新橋
岡部 商會
電話番町 一六六九
二二七六
阪急 夙川
岡部商會支店
電話番町 一九七六

六年以前あたはね銀山にかゝり御損失を掛候。處、舞の由縁を以て證文を残らず返し下され千萬、忝存じ奉候。フイン知た事ぢやわい金子の減少本家への聞を思召それ故の遊女通ひ始め嘘も誠さ成は我人若年の時を思ひ出し申候。ア、成程エ、先頃娘に右の入譯委細に承知仕候。故、輕少なから金子百五十兩先刻衣裳相改め候。節たんとすの大引出しへ差入置き申候。ア、コレ小春く、あのたんとすの引出し明けて見やサ、一、早うしやいのい、やいの其下の方じやわいのム、ほんに爰に入てござんすエ、あるかエ、右金子を以て小春殿を請出しア、コレ小春一寸マアコレを見やいの右金子を以て小春殿を請出し長く御添下さるべく候。エ、娘さん事はお末諸共今日日に致しチ、コレ小春く、おさんが尼になつたさいのく、エ、おさん様お尼にならしやんし

たら私や何させふぞいなシャテ、この通りおさんが尼になるさ書いてあるおさん様お尼にならしやんしたらわたしやどうしようくくくぞいなあ、でも、おさんが尼になつたさいのく、エ、娘さん事はお末諸共今日日に致し、貞玉智月と法名付天下茶屋尼寺安養寺へ連行先刻下され五拾兩は二人の者の飯料、即寺へ詞堂に上申候。皆迄讀す兩人はわつさ斗に聲を上そりや胴、愍なおさん様是まで格氣もなされずに逢し給はる其御恩聞入たるがかせになり、こんな事なら其時になぜそふ云ては下さんせぬコレナア申治兵衛様おさん様を呼戻し、千年も萬年も添さげて下さんせ此子は可愛エ、マアないかいな見れば見る程いたいけな愛にこぼる、稚子の乳房にはなる、いぢらしき孤子さなしたるは皆私からおこつた事、勘忍してさ斗にて取亂したるわび涙、理か

大坂御池
茶屋
電話新町三三番



せめて哀れなる折からうそく善六。太兵衛。門口細目にこりや見付たヤイ治兵衛めおれが請出して女房にする小春うぬは又何で引込だ引込んだくア、コレ太兵衛様くこま言云にや及ばぬ是迄重々意趣ある治兵衛めぶち殺して腹いよと双よりぶちかゝる利腕搦そでコリヤく三五郎く小春に怪我をさせぬ様働け働けナツトまかしよと締の助太刀あなたをちらちらと見る目あやなく氣をひやすいらつて打込善六太兵衛折よくはづせば二人はどし打そりや治兵衛めが切おつたさ。わめければせせなく乗かゝり日頃の意趣ささめめの刀コリヤく三五郎よくお末を連れて奥へ行くとコレ小春くコ、おじやくエ、なんにもこはい事はないくはてこわいことはないわいの斯成上は是非に及ばぬ、最後は網島の

大長寺人なき内にサアおじやと手を取急ぐ悪縁の未は涙のもしを草嚙の種と成にけり

贈用 命は是非の 文樂堂

文樂堂 御菓子 おかき あめ おこし お富貴者 文樂豆 文樂てい 味噌せんべい 結び昆布 銘菓珍味色々

文樂堂前 電話六六九〇

登録 商標 美商あめ

文樂堂 小大羅人繪形人樂文



義經千本櫻

道行初音の旅路の段

道行初音の旅路

静御前

忠信

竹本南部太夫
竹本小春太夫

竹本相生太夫

竹本南部太夫
竹本小春太夫

豊竹綾太夫

豊竹千駒太夫
竹本長子太夫
竹本播路太夫

豊竹駒尾太夫
竹本隅榮太夫
豊竹小松太夫

竹本長尾太夫

淨瑠璃名作の代表的逸品です。竹田出雲、三好松洛、並木千柳の合作になり、道行初音の旅路の段は義經の後を慕ふ静御前の所持する初音の鼓に躍つてくる狐忠信の振も床しき濃艶な夢幻劇で狐の化身の忠信は義經から初音の鼓を戴き義經のために其通力を以て守るこいふ錦繡美豊かな郷土藝術の獨壇上です。

床本 道行初音の旅路の段

戀と忠義はいづれが重い、かけて思ひははかりなや忠さまこそこの武士に君が情さあづけられしづかに忍

ぶ都をば後に見捨て、たびだちてつくらぬなりもよしつれの御行末はなにはづのなみにゆられて、たゞよひて今はよしのと人づてのうはさを道のしほりにて大和路さしてしたひゆく。見ばたせばよもの梢もほころびて梅がへうたふうたひめのさとの男が聲々にわがつまがてんじやうぬけてすえるぜん、ひるのまくらはずつがもなや、天じようぬけてすえるぜんひるのまくらはずつがもなや、チ一つがもなや、おかしからすの一ふしに人も、わらやのそだちにも春ははねつくてまり、ひいふうつくづくさきけはこち風音をへて、こそこの氷を徳若にごまんさいと君もさかへましますあいけふありや。たのもしやさぞなやまさの人ならば御かくれがはい

人形

靜 御前
忠 信
吉田文五郎
吉田榮三

野澤吉 豐澤廣 鶴澤芳之助 鶴澤友之助 鶴澤重造 鶴澤友造 鶴澤清二衛門 鶴澤友太二 鶴澤友太二 野澤喜代之助 野澤團伊三郎 竹澤團二郎

ざ問はん、ばれも初音の此つゝみ君
 のさかへを壽きて、むかしを今にな
 すよしもがな、たにのうぐひすもは
 つれのつゝみみくしらふあやなす音
 につれてつれてまねんさおくれればせ
 なる忠信も旅すがた、せなに風呂敷
 をしかさせたらおふて野みち、あぜ
 みちゆらりくかるい取なりいそい
 そさ、めだくぬ様に道へだて女中の
 足さあなごつて嘸お待かれ、こゝ幸
 ひの人目なしとせいめいそへて賜は
 りし御させながを取出し、きみと敬
 ひ奉る、顔はつゝみを御顔さよそへ
 て上におきの石、人こそ知らぬ西國
 へ御げこうの御かいしよう、浪風あ
 らく御船を住吉浦に吹上られ夫より
 よしのにまします由、やがてぞ参り
 候はんさたがひにかたみをさりおさ
 め雁ごつげめはごちらが可愛やゝを
 育つるつげめが可愛い、花を見すて
 りかりがねならば、ふみの便りも又
 の縁エ、そふじやいなくうたふ聲
 々面白や實に此鑑を賜はりしも兄次
 信も忠勤也誠にそれよ越方の思ひぞ
 出る檀の浦の海に兵船平家の赤旗陸
 に白旗源氏の強者アラ物々しやこ夕
 日影に長刀を引そばめ何某は平家の
 侍 悪七兵衛景清と名乗かけくな
 ぎ立てくなぎ立つれば花にあらし
 のちりくべつこ木の葉武者言ひが
 ひなし出や旁々よ三尾の谷の四郎是
 にありと渚に丁と打つてかゝる刀を
 拂ふ長刀のふならぬ振舞何れ共勝り
 劣りも波の音、打合太刀の鏗元より
 折て引沙躡るかり、勝負の花を見捨
 つるかま長刀小脇にかい込で兜のし

四ツ橋 十月の文樂座
りよ 消息 日誌

△十月一日

名作特輯興行の初日開場

△十月二日

さくら時雨再演記念のため土佐會の總動員で大鑑賞を開催されました、座内特別室に茶席を展べてさくら時雨に因む床しいお手前を披露しました。

△十月十四日

全國校外教護指導研究大會の慰安場として全國中學々校長他四百名を迎へて華々しい盛況を呈しました。島田府學務課長教護聯盟主事の方々のお骨折に感謝いたします。

△十月十五日

京大文科に御在學中の東伏見伯には非常に文樂に御精通遊ばされ屢々御來臨の榮を辱ふしてゐますが十月興行をこの仰



出でに星島家令其他をお連れ遊ばして御來觀遊ばされました。



御宴會日は
まづ!

……なかつゆ緒情歌南
が呂風水香なかや爽
すまゐてし待お
理料泉溫一南 のまさなみ

一七・一〇七・五
番一九二五・二三一號南……は用御の話電お
番〇三六西

橋ッ四

座員一同へ御放棄の御下賜がありました
非常に御熱心にお出であそばされ最終ま
で御覽じられました。

上げました。御援助を養はつた各方面の
方々へあつく感謝いたします。

△十月十六日

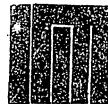
南木萍水氏主宰の「上方郷土研究会」會
員の方々が第一回文樂鑑賞會を催されま
した一同八十名に達し近來の盛會であり
ました。京大藤井博士俳人松瀬青々氏他
文人墨客趣味の識者を網羅してゐました

△十月十六日

京城女子師範學校生徒二十五名の方々が
修學旅行中の見學に教諭共々御來觀され
ました。宵庚申の八百屋、野崎村を通じ
て郷土藝術の芳香に陶醉されました。

△十月十七日

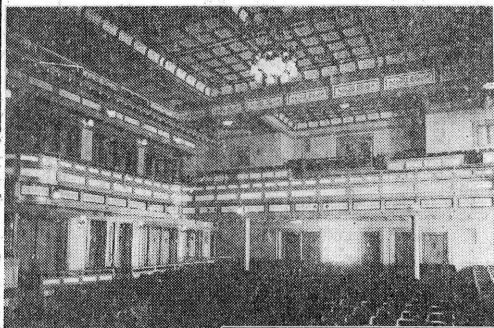
復興的名作特輯興行もいよくこの日打



割烹
家じあ

木綿橋西詰
電話二二三九番

新設椅子席は
季節一品料理

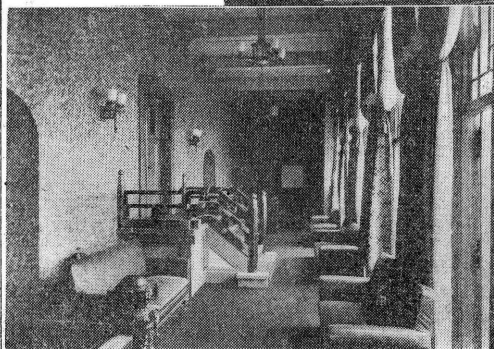


四ツ橋
文樂座
グラフィック

お囃を臺舞り上席覽觀

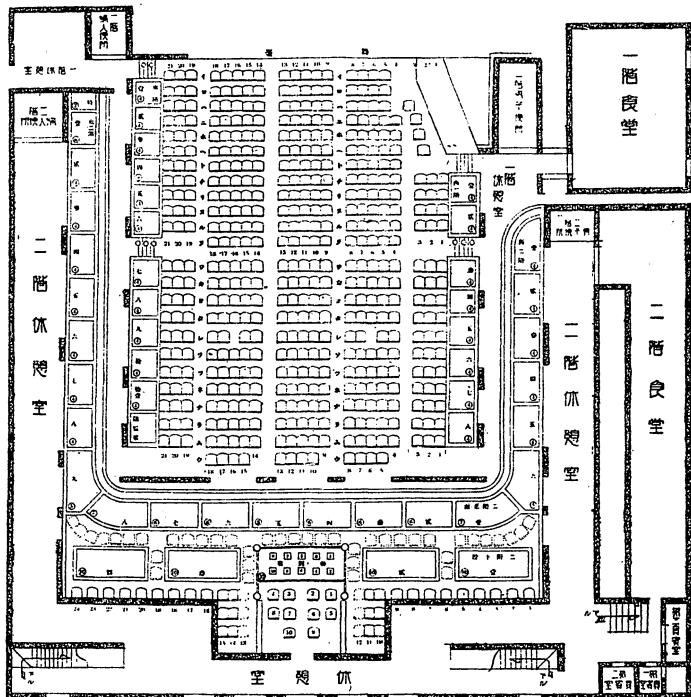


文樂座外観全景



二階正面休憩所と特別階入口

文樂座御場席案内



御観覧料の外一切御不要の上
 大部分椅子席になつて居りま
 すからお一人でも御愉快に洋
 服でもお樂に御見物が出来、
 またお出入が御自由です。

前賣切符、壹等お座席・壹等椅
 子席のお切符は五日前から發
 賣致します、また五日以後の
 お切符も壹等席に限り御豫約
 申し上げますから上圖の座席
 表に依つてお早く御望みの御
 場席をお申し込みになればお
 心のまゝにお好きな處が御自
 由にされます御用命の節お呼
 出しの電話は

南四七一―番で御座ぬます
 ・切符賣場右指定席切符は當日
 前賣とも正面西側本家入口に
 て發賣して居ります
 ・二等席・三等席切符は當日正
 面入口にて發賣致します。
 尚多人數様お團體様のお申込
 も御相談いたします。

お食事

西側別館の階上、階下に大食堂と喫茶室酒場が御座います。階上は洋食とバー。階下は和食本位の食堂、食事時間は混み合いますから一幕前に豫約を願ひます。お仕度を整へてお待して居ります。

賣店

一階と二階の東側休憩所に御座います。お菓子、番附、雑誌、お煙草その他幕間のお慰みの品々を取揃えて御座います。

お化粧とお手洗

殿方は西側の一階と二階に、御婦人は東側の一階と二階に御座います。(クラブ化粧室。)

お煙草

一階二階廊下に喫煙臺を備へてありますからお煙草はぜひ此處で願ひ致します。御座席では御遠慮下さい。

御携帯品

正面一階に御預り所が御座います。持ちものはなるべく御預り所へお預け下さい。お帽子は椅子の下に設備があります。お帰りは混雑いたしますから成るべく終演一幕前に御受取を願ひます。充分注意致しますが不可抗力の損傷は何卒御諒承下さい。

お出口

お下足札赤札は正面西本家入口でお渡し致します。黒札は正面入口東側でお渡し致します。

貴重品

各位にお持ち下さい、お場席お立ちのときは御携帯願ひます。

お場席

各自に御持ち下さい、切符に一枚づつ番號が附いて居りますからお場席の番號をお忘れないやうに願ひいたします。御祝儀お心附は堅くお辭退申上げます。不行届の點は事務室まで御注意の程お願ひいたします。

案内人へ

案内人がお茶を差し上げますから御休憩所でお自由にお飲み下さい。

幕間中は場内にて

寫眞撮影は絶對にお断りいたします。病氣其他の事故にて出場不可能の場合は乍勝手代役にて相勤めますから、豫め御諒承願ひます。

出演者

場合は事務室へお申込下さい『文樂座使用規定』を差上げて御相談をお受けいたします。各種催物、御集會其他社交場として御使用には最善の御便宜を計ります。

當座御使用の

一階西側に給茶處と大休憩所の設備が御座りますから御使用下さい。

御休憩の間は

四ツ橋

文

樂

座

前賣切符専用電話南四七一八番

電話南 七四〇八番

三七八八番

昭和七年十月廿日印刷
昭和七年十一月一日發行

大阪・四ツ橋文樂座
發行人 大塚 真三 編輯 成山 桂三 印刷所 永井太三郎

大阪市西區土佐堀通一丁目

大阪市西區土佐堀通一丁目
印刷所 永井日英堂印刷所



秋深みて

郷土藝術いよく、
もの皆更にまた甘味し
いつとても御好評を戴く

「文樂座の御宴會」を

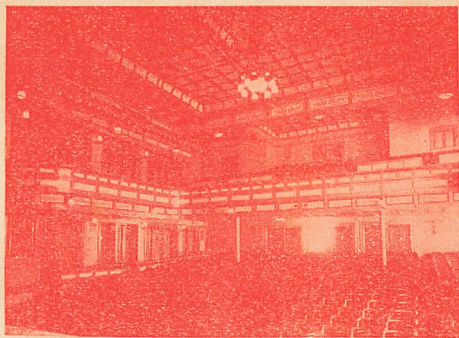
御利用下さいまし

金四圓五十錢也 (御一名様分)

御觀覽は……………一等椅子席
御食事は……………和食・洋食
番附……………役割と床本入
記念寫眞・人形をゐれた特別撮影
(即日お持歸りの出来る繰返成致します)

御申込は廿人様以上なるだけ五日前に願います

お電話は南四七番番お申附け下さい



粉白すか活をさし美の眞の女貴一に朗明と刺潑

白クラブ 粉



クラブ 水白粉・クラブ 煉白粉
クラブ はき白粉・クラブ 衿白粉